

奥田八二著『幾歲月：思い出の糸をたぐって』復刻

福留，久大
九州大学

<https://doi.org/10.15017/1916270>

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 1, pp.15-52, 2018-03-31. 奥田八二日記研究会(九州大学大学文書館内)

バージョン：

権利関係：

【日記翻刻】

奥田八二著『幾歳月～思い出の糸をたぐって～』復刻

几帳面な奥田八二先生

1970年台の後半の時期だと思います。奥田先生は、九大の学生部長の激務を終えられて、英国での在外研究から帰国されて、教養部長在任中だったかもしれません。「昼飯を食べようか」と、研究室に電話が掛かって、六本松の和食の店に誘われました。そして、席に着くと、一寸はにかむ風の面持ちで、「去年のきょう、ここで同じように食事したんだけど、覚えているかなあ」と、おっしゃいました。もちろん、覚えている道理はありません。「どうして、先生は覚えておいでなのですか」「僕ね、3年連用日記を付けていて、昨夜見たら、そういうことだった」。

という次第で、奥田先生の日記のことは知っていました。しかし、実物を拝見したのは、昨年1月21日、葦水忌の折が初めてでした。幾日分かの日記を拝見したのですが、その几帳面な記述には驚嘆致しました。そしてさらに、何十冊もの通常の日記のほかに、「幾歳月」と題する1冊の覚書が残されていることを知りました。幼少期から龍野中学・姫路高校・九州大学の学生生活を経て、県下一円の労働講座に精勤していた九大助教授就任の頃までの思い出が綴られています。福岡県知事就任の年、1983年の暮れから、1995年の知事退任の後、1998年の5月まで、実に15年間にわたって断続的に書き継がれた記録です。この覚書は、「幾歳月」と題された博文館の昭和58年(1983年)版の3年連用日記帳に記述されています。いわゆる「お布施事件」で記録類が検収される危険があったので、当時実際に使用中の日記帳は、4月22日から5月26日まで他人に預けられました。そこで、4月22日からの日記記載のため、代用の日記帳を買い求められました。

事件が終息をみて5月26日には元の日記帳が帰ってきたので、代役の日記帳の記載分は元の日記帳に写しかえられました。代役の日記帳は不用になったわけですが、「このまま捨てるのも勿体ないと思い、廃品利用の気持ちから」思い出の断片を綴るのに使用されることになったようです。その間の事情を窺い知ることができる著者直筆の4ページ分の複写を冒頭部分に添付しました。

奥田八二という人の人生の記録であると同時に、大正から昭和にかけての世相の変遷の一端をうかがわせる歴史の史料でもあります。

葦水忌に際して、幾つかの場面を抜粋して、所縁の皆様にお示しできないだろうか。実行委員のあいだでそういう願望が生まれることになりました。ある人にとっては奥田先生、別の人にとっては奥田知事、そういう得難い人、そういう大切な人、そういう立派な人、そういう人物の人生の軌跡を作品化する端緒として、完璧を期すことは最初から断念して、

ささやかながらも小冊子を作成してみました。これらの日記類は、最終的には、九州大学の奥田文庫なり大学文書館なりに収納されることかと思われませんが、とりあえずは、実行委員一同で整理に務め、適宜皆様にも御目通し頂ける形に整えたいと考えております。そういう趣旨の小さな試みの一冊です。ご覧頂いて、率直な感想・批評などお寄せいただければ幸甚でございます。次の作品への参考と致したいと考えております。

2014年 正月

葦水忌実行委員会世話人として 福留 久大

1：戸籍謄本による田麿（たなびき）家

（注記：著者による謄本筆写4頁分を編者が縮小・整理）

兵庫県飾磨郡曾左（そさ）村ノ内刀出（かたなで）村三拾六番

（祖父）戸主・田麿庄三郎 安政二年五月十六日生、

隠居届 大正七年五月二八日、

大正十二年二月十日死亡。

（祖母）妻・しな 文久三年六月九日生、

明治十九年四月十二日入籍、

明治三十三年七月二十六日午後八時死亡。

（実母）長女・はる恵 明治二十二年二月一日生、

明治三十九年九月二十五日 養子・繁之助ト婚姻、

昭和九年九月一日午前四時死亡。

（叔母）三女・さだ 明治二十六年十二月二十五日生、

大正三年六月一日大坪光次ト婚姻、

（注記：八二は、幼少時、叔母の大坪さだ宅に母・はる恵に連れられてよく遊びに行った。5km以上遠い所を歩いて。はる恵は繁之助と夫婦喧嘩になると大坪宅に避難していたらしい。）

（叔母）四女・よし恵 明治三十二年十一月二十日生、

明治三十四年一月二十六日 午後一時死亡。

（実父）繁之助（しげのすけ） 明治十八年二月十八日生、

明治三十九年九月二十五日 當郡余部村ノ内打越村五十七番屋敷・小林新吉・こまつ 二男、婿養子縁組 はる恵ト婚姻。

昭和二十年十二月十二日死亡、田麿正一届出。

[大正六年四月一日土地ノ名称変更ニ付本籍欄中「ノ内」及び「村」ヲ削除ス]

[田麿八二の兄妹]

光 夫（長男） 明治四十年十二月二日生、明治四十一年三月二十二日午後十一時死亡。

武 男（二男） 明治四十二年一月二日生、和歌山県有田郡岩倉村向井国松孫照興ト婿養

子縁組婚姻届出昭和十三年六月二十三日、昭和四十七年九月二十六日死亡。

- 三 郎(三男) 明治四十三年十一月二日生、大正二年八月三十日午後三時死亡。
- 正 一(四男) 大正元年九月二十九日生、有近みさをト婚姻届出 昭和十二年十月二十三日、昭和四十九年九月三日死亡。
- 五 郎(五男) 大正三年十一月十一日生、武田よし恵ト婚姻昭和十六年四月十六日、昭和十九年六月十七日死亡。
- 六 三(六男) 大正六年四月十三日生、大正六年六月二十四日午後六時死亡。
- 七 二(七男) 大正七年五月十日生、門口絹子ト婚姻。
- 八 二(八男) 大正九年十一月一日生、赤穂那波町佐方(さがた)九百四十番地・戸主奥田初治・同人妻春雄ト養子縁組、養父母及縁組承諾者田麿繁之助届出、昭和十年一月二十九日那波町長受付、同年二月四日送付除籍。
- 美代子(長女) 大正十二年一月二十九日生。
- 九 一(九男) 大正十四年五月十六日生。
- 十 郎(十男) 昭和二年三月二十日生、昭和二年七月十日午後死亡。
- 和 代(二女) 昭和三年九月一日生。

【著者による要約】

- ・繁之助 1885年～1945年(60歳)。

21歳の時結婚。49歳の時、妻はる恵死亡。

翌年八二奥田家に婿養子に。

- ・はる恵 1889年～1934年(45歳)、17歳の時結婚。

出生12人 男10人、女2人

- うち
- ・長男 光 夫 4ヶ月で死亡。
 - ・二男 武 男 63歳で病死。
 - ・三男 三 郎 3年で事故死(水死)。
 - ・四男 正 一 61歳12カ月で交通事故死。
 - ・五男 五 郎 29歳で戦死。
 - ・六男 六 三 2ヶ月で死亡。
 - ・十男 十 郎 4ヶ月で死亡。
 - ・長女 美代子 44歳で病死。

1984(昭和59)年現在生存 七二、八二、九一、和代の4人。

2：刀出での田麿家の生活

昭和10年の1月には刀出(かたなで)から佐方(さがた)に移ったが、50年近く前のこと、14歳の冬だった。私の生涯が一変したことはないが、この日記帳にはそれ以前、刀出時代について出来るだけ書き綴ってみよう。

父が酒飲みで母が病弱で、貧しい小作農、子たくさんというのが特徴のように思える。光夫、武男、三郎、正一、五郎、六三、七二、八二、美代子、九一、十郎、和代の12人が生まれたが、私は光夫、三郎、六三の3人については全く知る由もないが、武男の記憶は彼が大阪に出ていること、そこから帰省してきた時しか対面していないのではないと思う。それもいつだったか良く分からない。

十郎は何年に生まれたか知らないが、満1歳にならないうちに百日ゼキとかで死んだ。子守りさせられたこともない。

正一、五郎は小学校に行っている姿が目につく。そのようなのが一番古い記憶である。家の前のヤブの横の道をカバンを下げて行く姿である。正一は高等小学校を出た後すぐ家にいなくなった。神戸に丁稚に出たと思う。五郎はかなりなじみがあるが、高等小学校あと1年残して、これまた神戸に丁稚に出たのではなかったか。でもこの3人は年が離れすぎてか遊んだという記憶はない。

子犬のようにじゃれ遊んだのは、七二である。いつも連れ遊んだし、フトンも同じだった。野原をかけまわり、登校も一緒だった。

九一になると歳が離れすぎてか、遊んだ記憶はほとんどない。

生まれたころに村に電灯がついたのではなかったか。でも一戸に一灯が普通で、定額灯。定時に消え、定時に点灯があった。燭光は契約の電球で決まっている。ほら電気が点いた、ほら電気が消えたと時計代わりに生活が点消で規制されていたことを思い出す。

幼い頃に兄達がランプのスス取りのガラス拭いをさせられていたのを思い出すが、まだ家には電灯が来ていなかっただろうか、前後関係がよく良く分からない。

金持ちは別だがわれわれは一戸一灯しかなく、夜なべも宿題も一家みんな一つの裸電灯の下で団子になってやっていた。

仲が良い悪いもあったものではない。

(昭和58年12月17日)

一番古い思い出は？と聞かれたら……

冬か春か分からない、誰かも分からない、ある女性が、私をねんねこに入れておんぶし、雨傘をさして子守歌を歌っている。場所は、隣の田麿保さんの家から大道に行く径の上。女性のおくれ毛がゆらいでいる。私が2～3歳だったかもしれない。カラ傘の骨がすぐ上に見える。雨のあたる音も聞こえる。そのように思える。

この頃は太坪(注記：実母はる恵の妹さだの婚家)の従妹の往来がかなりあったように思うので、みどり、みさを二人の女性の姉の方だったかと思うが、みさをさんとしても少し私と歳の差が小さすぎるのではないか。

私をおんぶしていたのは誰だろう。隣の箱屋の向こうの道まで行くのはまれである。

(昭和58年12月18日)

3: 田麿家の兄弟の交わり

四男正一とは8歳の差。五男五郎とは六歳の差。七男七二とは2歳の差。長女美代子とは3歳の差で私に続いたし、その下の九男九一は5歳の差であった。

こういうことなので私は幼い頃は七二と妹の美代子が主な遊びの相手であった。美代子は下で女だったから遊び相手は七二兄だけといっても過言ではない。

遊び相手というよりは、何もかも一緒と言えた。同じフトンの中で又シャツや着物はお下がりといった調子。教科書もお下がりであった。朝はフトンの中から首を並べて食事ができるのを待ち、一緒に起きた。メシを何杯食べるか競争して叱られれもした。フトンの中で教科書を読むのを聞いて暗誦し、小学校唱歌も宙に覚えてしまった。小学校では難なくトップに立てたが、兄の影響は決定的だったと言える。

一年生の最初の学期に“学校”“蝶々”というのを石板(ろうせきを使った)に書けと言われて“ガクカウ”“テフテフ”と書いて大変褒めてもらったのを今も覚えている。川上という女の先生であったと思う。兄が教科書を布団の中で読んで聞かせてくれていたので、特に勉強したためではない。足し算、引き算の初歩にしても同じであり、九九の声も簡単に覚えていたと思う。今でこそ入学前にカナを書けるのが当たり前だが、私達の頃は必要なことを書けたのはクラスで私一人であった。留守中の用件も入学前に書き留めたのだから、その頃は良くできる子と言われた。隣のおばさんが褒めてくれたのを覚えている。

兄は、学校前の私を近くの山野や田んぼの畦道をよくひっぱりまわした。野生の植物や昆虫に関する知識を幼いながら教え、川での泳ぎや魚捕りも教えた。正月、節句、祭りなどの遊びについても私はチンクソのようについてまわった。妹の美代子はそういう相手ではなかったし、九一は歳が離れすぎている。

五郎兄は全くというほど遊びの記憶はない。入学当時、高等小学校一年で退学したように思う。月謝が納入できなかったためではないか。やめて神戸に丁稚に出た。優しい兄だった。

(昭和59年3月17日)

4: 少年時代の牛飼の経験

農家は牛を飼うことを通じ、肉生産の一端をも担っていた。季節はいつの頃だったろうか、馬喰(家畜商)が庭先にやってきて、肥育された牛と痩せた又は小さい牛を交換する談合をする。肥育牛がその農家の収入になる。貧農は牛そのものを所有せず、受託肥育するだけで新旧の牛の価格差を収入とする。新たに入れられる牛が懐妊している場合。それを目的としている場合が稀ではなかったが、次に出産する牛が雄か雌かに興味というか、楽しみがあった。受託肥育ならそれだけのことだが、自分の家のものである場合は雌牛の

出産は収入源として大きいから大変なお目出度でもあった。雄牛の場合、仔牛は数カ月親牛と畜舎で育てられるが、だんだん暴れん坊になり、手に負えなくなるので、農家としても手放したくなる。もっと置こうとすれば去勢するしかない。たいてい3ヵ月くらいで手放す。親牛との別れが畜生であってもつらいのだろう。離れ難く号泣する。見ているも哀れである。加えて、仔牛の屠殺場行きという宿命を知っている者は尚哀れを催す。

牛飼いの話に戻るが、牛飼いの途中で二つの事件があった。一つは牛が草を食べているとのみ思っただけで遊び呆けている内、牛がいなくなってしまう。夕暮れ暗くなるのに見つからない。ベソをかきながら帰ってたいそう叱られる。当の牛は隣村の方まで歩いている。ある時は山を越えて、山の中まで入り込んで満腹してたむろしている。村中大騒ぎで山狩りするようにして探し当てた結果がそうであった。

もう一つは夏の末に川原から田んぼに越境(?)して田んぼの稲をずいぶん広い範囲に食い荒らしているケース。稲穂が出かかったところを食い荒らすと、あとは全く米の収穫が無くなる。親たちからは大目玉を食らうが、子供達としてはどうしても処理の仕様が無い。田の持ち主と親との間にどういう結末をつけたのか知らぬが、この種の牛飼いの失敗は何回もあり、やや大きなものについては田の持ち主からひどく叱られ謝って勘弁してもらったものだ。

(昭和59年3月29日)

牛飼いしながら子ども仲間では川原であらゆる遊びをした。砂地に穴を掘ってトンネルを作ったり、取っ組み合いをしたり、竹馬に乗って競争したり、あらゆることをした。川魚を捕るのもそのうちの一つだった。

(昭和59年3月30日)

5：悲喜交々の運動会体験

10月10日は運動会と決まっていた。9月の新学期となると、毎日のように午後の小学校は運動会の練習になる。低学年はお遊戯、高学年になると騎馬戦が印象に残る。障害物競走、紅白のボール籠入れ、それから勇壮なのは棒倒しであった。

5つの部落から成っていた小学校だったが、部落対抗リレー競走は運動会のフィナーレを告げるにふさわしいものだった。

当日は朝早くから、部落の青年団が競技トラックの周辺に割り付けられたように陣取って見物用のテントを張った。父兄家族は祭りの残りのご馳走のほか思い思いに弁当を作り、茶を準備して観覧し、かつ昼休みに子供が飛び込んでくるのを待った。

学童たちはメインの席の両側にクラス毎に紅白の帽子やタスキを付けて出番を待った。昼が来るとテントに向かってダッシュした。父兄席の後ろの方にはバナナ屋、アイスクリーム屋、砂糖きび屋など、いろいろな店が来た。昼休みの一時が、これらの店に寄っていく楽しい時であった。

父兄にも二人三脚や借り物競走などの出番があった。

特に思い出は小学校の一年生の時、「ぎんぎんぎらぎら夕日が沈む」の遊戯をしたのと、

目隠しして30mほど先にばらまかれた柿拾いをしたことであった。私は一個も拾えなかった。目隠しのために前に進むのが遅かったのか、方向を誤ったのか、どちらもかであろう。後で聞くと、目隠しはいい加減にするとか、途中で目隠しの手拭を緩めてずらすかすればよいとのことだった。

運動会は夕方早目に終わった。先生達も父兄たちそれぞれに、後で懇親の慰労会をやっていたようだ。

運動会での悲しい思い出は、小学校上級生の頃だったが、母が病気で弁当持参者がいないことがあった。自分で作って持ってきた平素と変わらぬ弁当を運動場の片隅で妹達と一緒に食べたことがあったわけだ。一番うれしい弁当がないのだから、嫌な思い出である。それから運動会といえば、みんな真新しい白のシャツ、運動パンツを着用する。村にも貧しい人がいて、新調物でない洗濯したものを着てくる子があり得た。白さで判別できるのだが、卑下する姿がいじらしかった。貧しくとも大体の親は、この日とばかり子供に新調物を着せるのが常であったはずである。

シャツといえば、学校を出て右に折れた刀出の方向に県道を100mほど行くと、左手に永井ミシン屋と称する店が新しくできて、そこが帽子も含め取次店になっていたと思う。この店は、堤防のように高くなった道のわきに張り出したように建っていたが、実家は道の下の方にあった。紅白の帽子はしばらくは学校用にもなっていた。(昭和59年4月4日)

6：昭和の初期の学校制度

小学校の頃は上級学校といえば、中学校（これは男）、女学校（これは正式には高等女学校といい、女子ばかり就学）の二つのものがあった。それ以上のものについては知らなかったし関心もなかった。

尋常小学校は6年、その上に2年の小学校高等科というのがあって、曾左（そさ）は両方が併設されていた。

だんだん時代が下がったせいか、高等小学校へ行くのは常識的になりつつあったが、それでも尋常科だけで止める人もあった。

武男兄は高等科1年で途中退学。その他は兄弟みんな高等科を卒業した。

その昔、尋常科も4年制であったという。私の時代には中学校や女学校に行く人はゆとりのある家庭の子に決まっていた。クラス男女合計45人そこそこだったが、5~6人が進学し、あとはみんな高等科に行ったり、私もその仲間だった。

小5になると、先生が進学準備の気持ちでクラスの仲間に接するし、6年生になると、放課後に残して特訓した。進学しない者は残って補習を受けるか否かの自由はあったが、その目的がないのに補習を受ける者は実際にはなかった。

大まかな感じだが、補習を受けた者が良くできるかといえばそうとはいえなかったと思う。江原、三木、黒川その他女で誰が進学したのか定かな記憶はない。刀出の後輩では大

谷明、田麿仁は龍中に行った。私は養子で奥田家に行った後、高等科卒業後に龍中に行ったので、彼らの後輩になった。中学校では、時々顔を会わす程度で別段違和感はなかった。あまり物を言わなかった。(昭和 59 年 10 月 23 日)

7：郷土史に描かれた刀出

大谷峯次氏らが編集した“みねあい”（郷土史）〔昭和 59 年 3 月 1 日〕にはいろいろなことが書いてあって、私の記憶を正してくれるのだが、その 190 ページに私の生まれた刀出について次のように記録してある。

…私たちの子供の頃の刀出村は、戸数六十戸余りで、農業を主としており、副業として山林業、養蚕、製粉、そうめん等の仕事を兼ねていました。井堰が二ヶ所あって、上代関係十八町歩、下代十八町歩の水田農地があり、米麦の栽培をして生活をしていました。そのため、水利権についての争いや地境論が近隣との間に起こりました。刀出には「けんか太郎」が多かったことが有名であり、小学校が遠距離であったことも原因で、体力の訓練が出来ていたので、曾左校区の運動会では田井と優勝争いをよくしました。又日中戦争、太平洋戦争の出征兵士の戦死者も特に多かったのです……と。

なかなか感じがよく出た文章だと思う。

家でも五郎兄は戦死、七二兄はけんか太郎の代表といえるだろう。そして、村民みんな貧乏。

同書 232 ページには次のような記録がある。

…刀出の氏神を冠神社といいます。お社の背後の山の中腹に、冠岩といって鳥帽子によく似た巨岩があるので、この岩にちなんだ神社名だと言われます。岩信仰については、神々は山頂や巨岩に降臨し、それを依り代とするとされ、山頂や巨岩自体が超自然的な存在であるところから、古代の人々は神の座としてあがめてきたのです。そしてそれを御神体と考えました。又、飾磨郡誌によると、祭神は飽喰之宇斯能大神（アクグイノウシノオオカミ）とされていますが刀出の伝承によると、冠岩は記紀神話の国土創造神である伊装柵命（イザナミノミコト）の冠であるとして冠岩を御神体としています……。

という記録があるが、このお宮には神主もいず、小さなものでさびれた姿でしかないと思う。氏子が貧乏だからであろうか。(昭和 59 年 11 月 4 日)

8：貧困に苦しんだ田麿家

武男は年長だったので、先ず外に口減らしの役にまわった。正一、五郎、七二の 3 人は五郎を頂点に犠牲者となった。五郎は陸軍志願という一番悪い道を選んだ。家庭の犠牲から逃れたかったためだろうが、より悪い場所に逃げ込んだようだ。

私は口減らしに佐方に行った。母の死という偶然がそうさせた。母が死んでなかったら、私は高等科を卒業して国鉄に入ろうと大坪好春君と相談していた。大坪はその通り国鉄に

入った。私は家庭の貧困から逃れた。

母が死んだので、あとは貧困はそれ以上子供達に犠牲を強いることはなくなったであろうから、七二もその下の兄弟も、同時に正一も、貧困そのものに追っかけられることはなくなったと思う。その代わり、美代子のように家事仕事にほとんど没入させられるという犠牲者が出た。その意味で、彼女も貧乏くじを引いた。

母は病身であったが、生前と死後とでは家事はやはり違った。私も家事はよく手伝った。他の者も同じである。父も勿論責任をもってみんなに食わせる心配をした。

しかし、母の死により家事の負担はいっぺんに美代子にかかってきたようだ。彼女は大正 12 年生まれ、母の死が昭和 9 年だから、11 歳である。まだ役に立つ年齢ではないが、それでもすぐに徐々に役に立つ年齢でもあった。母の死後、私は佐方に行ってしまうので、美代子の働きは定かではないが、そのように働いたのではないかと考えている。

三郎は 3 歳まで成長したのだから成人したはずなのに、裏の葬式がある日に、井戸に落ちて死んだという話である。葬式が重なって大騒ぎになったらしい。

2 ヶ月、4 ヶ月で死んだのが 3 人もいるが、十郎の場合は百日咳と思う。子育てに不熱心だったのか、他に原因があるのか知らない。母体の栄養不足で虚弱児が生まれたのかもしれない。死ぬから次が生まれるということで、育ていたらあと二、三人は生まれてこなかったかもしれない。

そういう意味で、われわれ弟分は偶然の産物といってもよい。12 人兄弟のうち、4 人が夭折、4 人が若死、あと 4 人が今日生きている。これ皆運命みたいな気がする。

今日のように医療や保険・社会保障が発達していたら、母ももっと長生きしたろうし、こんなに多くの子供が死ななかつたろうし、反面生まれても来なかつたに違いない。「奥田さんは運の強い人じゃ」と今日、人は言う。真実そうかもしれない。

刀出の清水垣にあったわが家が前内垣の今の所に引っ越したのは昭和 7 年か 8 年か。これもわが家の貧窮からそういうことになったのだが、私が高等科に入った年か 6 年 (注記：尋常科) の年かである。母は新しい家に 1 年ほどしか住んでいないことになる。

(昭和 59 年 11 月 20 日)

9：少年時代の辛い思い出

少年時代についてももう少し書かねばならぬことがある。

和代の話など入れて総合して見ると、彼女が生まれた昭和 3 年から母が死ぬ昭和 9 年頃まで (1928 年～1934 年)、我が家は母の病気がちの生活で、最も悲惨だったと言えよう。その意味で私の小学校生活を通じてずっとである。

武男や正一は小学校入学の時は皮カバンを買ってもらうとか、まだゆとりのある家計だったようだし、叔母さだが大坪と結婚して長女みさをを生んだ頃など村の人が羨ましがするような乳母車を買って与えたと言われる。

私は、昭和 2 年小学校入学の時は事前登校に際し、母が学校に来てくれなかった。病気のせいだろう。父も来てくれなかった。友達の母が連れて行ってくれたし、私が一人で行ったこともある。友達の母は、二度目の事前登校の時、私が一人で行ったことを大変心配もし、その決断を讃美してくれた。六角橋を渡るのか、まっすぐ南下するのか迷った末、正しく行ったことを覚えている。子どもにとって西坂までは実に遠い道のりであった。私は小学校を通じて、いわば元気な母なしで過ぎたといえよう。

だから、運動会の時、遠足の時、ろくに弁当を作ってもらえなかったし、友達と同じような菓子類も持たなかった。

遠足といえば水筒、リックサックは多くの友が持っていた。なのに、私は風呂敷に自分で作った握り飯をくるりと巻いただけで、引け目を感じばなしであった。運動会についても似たり寄ったりではなかっただろうか。特にそう感じたのかもしれないが、私の生活に母はなかった。自分で炊飯すること、弁当を作ることは当然でさえあった。

特に私が高等科に進む時は七二兄はいなかった。私が最年長者で全て自分で面倒をみるしかなかった。父は母の病気の時炊飯したのであろうし、われわれもそれをせねば事足りなかったはずである。洗濯もつぎはぎやボタン付けも自分でした。でないと、友達の前であまりにも哀れだったからである。

前田重雄先生によると、八ちゃんはよくできるが拗ねた所があったという。友達が中学校に行くのに、己はその希望がないという事実がそうさせ、又他から見るとそう思えたかも知れぬ。

特に、私が悪かったのは 5 年生の時、昭和 6 年頃だろうか。優等賞はこの年だけ貰い損ねた。僻み根性が出てどうにでもなれば式の態度に出たのかもしれない。貧乏のどん底で、画用紙一枚買うにも、クレヨン一箱買うにもカネがなかった。教室のどこかに鉛筆や消しゴムの落ちているのさえ拾って、自分のものとして使用したことがある。大塚先生は嫌いな陰険な先生だったので、拍車を加えたようだし、その頃から中学への進学の数人は放課後、受験指導してもらっており、私だけ仲間はずれされたように受け取っていたのであろう。拗ねることが多かった年齢であったのかもしれない。とにかく、自分で良く生き抜き、耐えてきたものだと思ってしまう。この頃が一番危機ではなかったろうか。

高等科に進むと、当然成績が良く、三木先生からも注目されていたが、拗ねる態度はあまり変わってなかったかもしれない。それでも高等 2 年の時、大坪好春君が国鉄勤務の人に特別縁を持っていた関係で、卒業したら国鉄に行こうと固い契りをしていて、職業への真面目な気持ちは持っていた。

佐方に養子に行かなければ、私は大坪君と共に国鉄に就職していたと今でも思っている。

(昭和 59 年 12 月 30 日)

昭和9年9月1日に母が死んで、私の生活は全く違うコースをたどっていくことになる。母の葬式の時に既に話が出たのではなかろうか。打越の伯父小林新治氏がその娘春雄に女子しか子がないことを念頭に置き、私を養子に貰えと勧めたようだ。

父はその話に乗ったに違いない。底には食い口を一人でも少なくする意図があったに違いない。もう一つは、私がまだ在学中で、かつ比較的良くできるとの評判があり、適当と考えたであろう。

打越の一軒隣に谷川雄吾・曾左校長がいた。この校長に、そのことを話した。校長は三木教頭に話を伝えた。三木先生もこんなに良くできる子をこのままでは惜しいと言ったろう。奥田初治・春雄と養子縁組させると中学校にも進学させるだけの家計はある、ということでは裏の方で進められたらしい。

奥田家とは、春雄の父新治が佐方に行ったのではないか。初治氏も乗り気になったに違いない。10月の末頃だったろう。新治氏が刀出に来て、私に意見を聞いた。勿論、私に特別の意見があるはずがない。佐方に行ったら中学校へやってもらえるんだと彼が私に言ったことは覚えているが、私は中学校への進学を特別に魅力あるものと考えたことはない。ともかく、お任せするしかないということで、特別の返事を私はしなかったと記憶する。父が私にすすめたのはそのことだったが、これまた私は特別の返事はしなかった。話は私の周辺で進んだのである。

谷川、三木両先生も熱心に話を進めたのであろう。その結果、この年の正月に打越まで来ていた奥田初治一家が揃って刀出に来ることになった。1月5日だったと思う。

私はその日、何か品物を揃えるために姫路に買い物に自転車で行っていて、その帰路、奥田一家と打越村の出口で、その街道で行き違ったように思う。多分、新しい学童服か下着か養家に着て行くものを買に行っただけではなかったろうか。

客人達に私が話したわけでもなく、家族でお別れの宴をはったわけでもなく、当面の下着を詰めたカバン様のトランク一つを提げ門まで見送った弟、妹と別れを告げ、奥田一家に加わって刀出を去った。バスを利用して姫路駅に行ったのだろう。駅前のどこかの食堂で昼食を摂った。

幸(みゆき)はもう4年生でちゃんとしていたが、和子はチョロチョロ、とし子はその母の腕の中にいつも抱えられていたように思う。

相生の駅はそう遠いとは思わなかったが、山陽線を西へ旅するのは初体験であった。もっとも東へ旅するといっても2~3回も経験したのだろうか。相生の駅からタクシー利用で佐方まで行ったのには少々驚いた。何しろ、タクシーなんて初めてで知らなかったのだから。

佐方の家の構造は特に珍しいとは思わなかったが、入った土間や他の部屋の構造ががちりして、かつ新しい感じがした。

もうその翌日だったと思う。東の松田の母親との話で貞夫君が私を学校に連れて行ってくれる話がついて彼はその後の友ということになった。

佐方では私は恥ずかしさもあって言葉少なく必要最小限しかものを言わなかっただろう。子どもといっても相手は女で遊び相手ではないし、余談を語るチャンスが少なかった。

奥田初治 明治 29 年 (1896 年) 11 月 5 日生まれ

〃 春雄 明治 35 年 (1902 年) 5 月 30 日生まれ

であるから、養父は私より 24 歳、養母は 18 歳上である。もう 50 年も前の話である。

養父 39 歳、養母 33 歳の時である。よくも決心がついたと思う。まだまだ若いのに、よく思いきったものだ。子育ての初期にもう一人の子供を抱え込むのだから。勿論、出来れば長女みゆきが私の結婚相手であるとの予期があったであろう。が、海のものとも山のものとも分からない、まだ 13～14 歳の男の子でしかない。

ともかく、私は那波小の高等 2 年に編入された。当時は皆徒弟学校の受験に熱中していた。播磨造船所の下級幹部養成校でそれは陸 (くが) の那波駅近くにあった。養父母はその道は希望している様子はなく、むしろ中学校へ行かせたかったようだ。高等科 2 年の者が行くとなると、2 年も級落ちすることになる。それでもいいと思ったようだ。しかし場合によっては徒弟学校でもいいと考えたのではないか。

そういう希望がどこからどう伝えられたのか、私は早速小 6 の受験勉強のグループで補習勉強をすると同時に、佐方にいた真田先生のもとにもやられた。先生の弟の忠二が龍中の 1 年生になっていて、私と松田が補習を見てもらう形となった。真田先生は鷹揚な良い人で、裏の離れの 2 階が松田、忠二、私の 3 人が勉強したり遊んだりする場所となった。むしろふざけて遊ぶ時間の方が多かったかもしれない。先生は夜遅くなることが少なくなく、毎日の補習にも身が入らぬことが多かった。

松田は徒弟学校を志望しながら、姫路師範も受験すると言いだした。そして私もそれに追従してみるようになった。

徒弟学校受験のため勉強準備に余念のない那波校の同級生達は算術のある部門では私よりも良くできる人が少なくなかった。

「曾左校の一番は必ずしも那波校の一番にあらず。」と、当時肺病やみの受け持ちの某先生が私に言った。その言葉がいまだに忘れられない。だけど、私は那波校のクラスメートがそんなに良くできるとは思わなかった。中学校の受験準備の補習クラスに出てみて、そのうちの数人はよくできると思ったことがあるが、彼らは姫路中学に入学した。徒弟学校の試験がいつあったか知らない。又、中学と師範の試験日がどうなっていたかも忘れてい

る。ともかく、事の次第は師範が先で中学が後だった。

私は松田と姫路師範を受験した。師範では実技と身体検査が先にあって、合格者が第二次試験の学科試験を受ける仕組みだった。

ところが、私は体育実技と身体検査で不合格となり、50m の疾走テストなど成績が悪かったと思う。松田はそれに合格、後の学科で不合格。

さて、師範不合格なら中学校だが、姫路は冒険過ぎるから赤穂中か龍野中のどちらかと

いうことで、養父は赤中といったらしいが、6年受け持ちの楠本先生が龍野中で大丈夫ですと言ったらしい。

事後の感想だが、試験は易しかった。入学は1年4組で、3番目に名を呼ばれたので、級長、副級長の次の成績だったと想像している。

龍野中学は自転車通学が最も便利が良く、陸の自転車屋からギヤエムの新品自転車を買ってもらった。入学決定と同時に、洋服、帽子、外套など注文し、保証人も決めねばならなかった。北龍野の林保治(父の妹の婚家)宅に決められた。こういう世話は全部養父が骨折って準備した。黄色のゲートル、黒の靴、ピカピカの自転車、真新しい洋服、いかにも新入生らしい形になった。

佐方からは一年浪人の山本隆君が同時入学で初めは誘い合わせて一緒にペダルを踏んだが、長続きせず、一人で勝手な時刻に出発した。普通の早さで50分かかる距離だった。実のところ当初しばらく、中学校とはどんなところなのか、何故養父が中学を進めたのかよく分かっていなかった。又、中学一年の授業はそんなに学習に骨が折れたとは思わなかった。英語は多少骨が折れたが、他は、特に国語など易しいと思った。養父は万年筆、時計、英和・和英の辞書を買ってくれたし、中学校の方の勧めで、漢和大辞典も買ってもらい、この種辞書を引いて勉強に励んだ。勉強は面白かったし、刻むように身につけるのが好きだった。特に、英数国漢の中核科目は面白いと思った。だが、勉強の虫のような生活はできなかった。

養父は造船所の伍長、職長を務めていたようだ。海軍志願兵として呉に行き、恩給をもらえるようになって造船所に入社した。結婚は、春雄とは再婚にあたる。前妻は西脇系ではなかったか。海軍時代に春雄と結婚している。それは大正12年(1923年)3月1日、27歳の時である。幸が生まれたのが1925年である。

養父初治氏は住吉の梅本伊之助・とよの4男で、明治35年2月18日6歳にして奥田伊左衛門・しうの養子となる。1979年7月10日姫路の聖マリア病院で死ぬまで83年間、まじめに暮した人だし、私にとっては様々な意味で恩人である。

私も彼には尽くしたつもりでいる。特に彼は造船所で働いて帰宅し、すぐさま野良仕事に行きたくなかっただろうし、その代わりに中学校に通学しながらではあるが、私が務めた。私は中学校時代、入学後間もなくテニス部に入りたかったのだが、養母の願いを聞き入れて学校から帰るなり、あらゆる意味で農家の手伝いをした。農作業はもとより、家内のこまごました仕事まで何でも手伝った。しないことはなかったし、出来ないことはなかったと思う。15歳から19歳までだから、しようと思えばできるし、役立つ年輩だった。両親は、私を一人前の農業労働者として珍重がっていたようだ。農繁期には中学校から急いで帰宅し、カバンを投げ込んで作業服に着替え、田んぼに駆け付けると、一人作業していた母にとって百万の援軍に思われたらしく、近所の人にもそれを打ち明けていた。住吉の祖父母も養父からよくよくその旨を聞いていたらしく、中学校の帰途などたまに立

ち寄ると、まさに二宮尊徳だと讃えてくれるのが常だった。過剰表現かも知れぬが、私はそういわれるに値するほど農作業に力を入れた。農閑期でも仕事は常にあった。冬場の薪作り、毎日の牛の世話、四季ごとの畑仕事、コヤシ汲み、藁仕事等々用に事欠くことはなかった。中学校の勉強は夜に限られた。
(昭和 59 年 12 月末)

11：龍野中学時代の猛勉強

私は、龍中に 12 番で入ったと推測する。1 年 4 組で、級長が平木、副級長が藤平、その次に私が呼ばれた。入学後は、身長が順が名簿順になったが、最初はそうでなかった。一学期はすぐ済んだ。貰った通知表で各科目の点数は気になるから見るが、後はどうでもよかった。父に見せたら「お前、2 番目やないか！」と喜んでくれた。どうしてそれが分かるのか、私は席次という表の箇所の意味するところがそれだとは、初めて知った。その後、各学期を通じて、一度 3 位になったことがあったほかは全部 1 番であった。学年通しての成績は 1 年から 4 年まで全部 1 番だった。校長が進学希望を全員、成績順にクラス分けし、非進学者を 1 組として一クラスにまとめ、他を 2 組以降としたので、私は 2～4 年を通して 2 組の級長を務めた。高等科を終えて入学した者は 3 年生まではかなりの成績だが、4～5 年でそれが維持できるかどうか疑問というのが一般の通評で、先生もそのことを私に言ったことがあるが、私はその通評を覆したことになる。それだけに苦勞して勉強したと今でも思っている。

学校から帰ると、すぐ田んぼや山に行き、勉強は夕食後に限られた。7 時か 8 時から 11 時頃まで、朝は 6 時半か 7 時に起き、自転車で 50 分の通学だから、夜の勉強がすべてだった。英数国の重要科目は予習をした。国漢はよく字引きをひいてノートして行った。試験時期は例外的に帰宅後すぐに机に向かった。自転車の上でも勉強した。今日のように交通が輻輳していないから、自転車で行く片手と目は勉強に使うことができた。自転車といえば、1 年生の時、帰宅時に那波の者達とふざげ半分に乗り進んでいて、相互の接触で私が倒れ、その瞬間、牛車が倒れた私の自転車の上を通り、新しいのに前輪をゆがめてしまい、新品と取り換える（前輪だけ）事故を起こしたのを思い出す。それ以外は、むしろ愛車家で、毎日掃除、油さしその他維持に努力した。4 年間、1 台を立派に保持し続け、私の後、父がまだ長らく使っただろう。
(昭和 60 年 1 月 27 日)

12：北原白秋を契機にして

我が生い立ち

…時は逝く、何時知らず柔かに影してぞ逝く 時は逝く、赤き蒸汽の船腹の過ぎゆくごとく（過ぎし日第二十）

時は過ぎた、さうして暖かい刈麦のほめきに、赤い首の蛍に、或は青いとんぼの眼に、黒猫の美しい毛色に、謂れなき不思議の愛着を寄せた私の幼年時代も何時の間

にか慕はしい「思い出」の哀歌となってゆく。

〔北原白秋、抒情小曲集「思ひ出」初めのページ〕(明治44年刊)

北原白秋生誕100年祭が1月25日柳川市民会館で行われた際、この「思ひ出」を私のカバンの中に忍ばせて、現地に行って挨拶したのだった。彼の童心とそれを表す詩情に感慨深いものがあった。(昭和60年1月27日)

白秋100年のことで、県もこれに係らねばならぬことになり、私は少しは白秋を思い出す契機を得た。少しのページを使い、もう少し少年時代のことを書いておこう。

今の子供達は物質文化の恩恵に浴し易いが、私達の子供の頃は山猿同様に育った。今の子供のような出版文化、電気器具文化に触れることはなかった。

3年生ぐらいの頃、周一君の家に蓄音機が入ったということで見に行った。とても珍しかった。箱の上に大きなラップがのぞいている。ハンドルを回してねじを巻き、レコードをかけるのである。浪花節(浪曲)によく耳を傾けた。

この家の前にトマトが栽培され、採って食べさせてくれたのだが、慣れない味のため、吐き出してトマトは捨てた。

山に黄イチゴを採りに行った。川原の茂みの中にスカンポン(ダンジ、イタドリ)の太いのが生えるのを待って採りに行き、塩を付けて食べた。秋にはアケビを採って廻った。ユスラウメ、グイビなど食べられるものは何でも採って食べた。ウメは食べると病気になる心配があって、なるべく遠慮ということであった。柿は意外と少なかった。当時の農家はこういう実の成る木の育苗にほとんど無関心だったのではないだろうか。秋の栗は拾い、生でよく食べた。渋をとるのが面倒だったが、面倒など避けるゆとりはなかった。このような自然の中での生活だから、一寸した指導があれば、白秋のような詩情の表現ができたであろうに。指導がなかったのであろう。

村で進学したのは、峰ちゃん(師範学校)、ずっと遅れて私の一級下の明さん、二級下の仁さんぐらいのものだった。勿論それより下の者で、徐々に増えたが、中学校進学さえこのように寥寥たるものでしかなかったから情緒の発現に事欠いたのはいうまでもない。教育指導の重要性を今更のように感ずるのである。

今日でも、農村といわず都市といわず、子供を立派に育てようとの意図と努力と方法さえ準備されれば豊かな文芸が育まれるはずである。受験一本やり、塾ばやりの現状を憂える。(昭和60年2月6日)

13: 中学時代の学資と給食

中学の時は家の農作業の手伝いをしながら、母にはそれなりにモノを言っていたが、1年生の夏、室津の水泳教室合宿があって、その参加費をくれと言う勇気がなくて、参加しなかった。今でもこれが頭に残っている。同僚の中にもカネがなくて参加しない人はあったようだ。

4年生の時の修学旅行は、先は日光まで5泊ぐらいの旅だったが、貧しくて参加できない人がいた。それでも級友は結構楽しくやった。

昼の弁当は教室でみんな持ってきたアルミの弁当箱を開いて自分の机の上で食べるのだが、1年の時、斜め前に大谷という龍野の料理屋の息子がいて、これが毎日蒲鉾のおかずを食べるのが目に付いた。我々通常は、メザシとか昆布の佃煮とかの類で、蒲鉾は特別にいいものと思われたし、クラスでも評判であった。

2年生の時だったと思うが、校長が山田氏から松本氏に代わり、学校給食（副食物だけ）が始まった。校内に給食施設を作り、調理人を雇い、器具を揃えるだけでも費用がかかったと思うのだが、これをどう調達したのか知らない。生徒負担は、食器と月いくらかの費用だった。当時、授業料は月4円50銭とかで合計5円。これは家計にとってかなりな負担と思えた。一家の惣菜買物に要する家計費が月10円ぐらいだったから5円は大きかった。その時の給食費はなぜか頭に残っていない。1円ぐらいだったのではなかろうか。アルミの食缶に豚汁を運んで来て配分、飯の方は朝のうち大きな木箱に名札のヒモで印をつけて各自積み込み、当番が蒸場まで搬入、又昼に取りに行く。50人クラス4組、5年生までで計20クラス、クラス毎に一箱に入れられた大きな木箱を蒸すのだ。昼食時はアツアツの飯が戻ってくる。これはみんな喜んだ。当時給食の考えなど斬新なものであった。只、父兄の中には松本校長のこうしたやり方に反対する声がちらほら聞かれたという。弁当箱の中にタクアンを入れている者があると、それが蒸されて教室中特別の匂いをまき散らしたことは度々だった。豚汁しか覚えていないが、同種の物以外に何があったのだろうか、汁物が通常だったことは確かである。
(昭和60年3月19日)

14：中学生時代の勉強ぶり

中学校時代の良くできる同僚といえば、三木（足立）、小山、広田、関口、それに平木などいて、トップグループをなしていた。

私があるうちトップを続け得たのは、主要科目では私が譲らねばならぬ人もあれこれあったが、私は芸能や体育など、これらトップグループの者が平凡な成績しか取れない科目で、私がいい成績を取ったからである。

ただ、私は国語漢文では人に負ける気がしなかった。漢文は特に大辞典を引くのが好きで、夜遅くまで字引きを引いて、字についてノートを作って下調べし、先生の質問にうまく答えて褒めてもらうことが多かった。面白くて仕方がないという風であった。現在よりはるかに多くの文字についても知識を身につけていたであろう。

佐方から中学校へは自転車で50分ほどかかった。天気が良い日など片手でハンドル、片手で英単語カードをくった。時には幾何の問題を解くのに図形を眺めて考えたりもした。一題は解けたものである。
(昭和60年5月14日)

15: 修学旅行と帰途の失敗

修学旅行には苦い思い出があるから、是非書いておく。

洋服は冬は黒だが、夏だから制服の霜降り(原文のまま)、それに平素のカバンを持ち、着替えなど入れたのだろう。コウモリ傘を持って行った。コースは、国鉄を使い姫路から山陽、東海を経て東京、日光まで、箱根はバス、電鉄だった。

軍隊編のようにクラス毎に小隊、4クラス小隊、合計200人ばかりが全員で1個中隊ということになる。私は2組の級長で当時は席次がトップだったので中隊長にさせられ、整列点呼その他責任を負わされた。

全コースほぼ平穩に経過した訳だ。担任の先生が4人とそれに加えて私の記憶では“マントク”といった教練の先生がいた。万年特務曹長を略した我々のつけたあだ名、青山と言ったろう。その人が付いていた。

ところが、私は最終点で重大なミスを犯した。大阪見物をする自由時間が2時間ほどあったのだろう。阪急の屋上に整列して自由行動に入った。ところが私は屋上のベンチで掛けたまま眠ってしまったのだ。集合は大阪駅の改札口前だったはず、ところが深い眠りに陥ってしまって、私はそのまま集合時間に遅れてしまった。

ハッと気がついて間に合うか駆けつけてみたが、既に一行を乗せた列車は発車した後になった。私は大変なことをしたと思い、阪急電車で一行を追ってみた。神戸でも間に合わなかった。次の時間の国鉄を利用して姫路で下車した。一行のうち数人がまだ姫路駅にいた。

私は彼らに先生が僕を探していなかったかと聞いてみた。「知らん」と言う。そこで私は次の列車に乗って相生(当時は那波と言ったかどうか不詳)まで、そこから佐方まで徒歩で帰宅した。姫路駅は旅行団の解散地点だったので仲間数人がいたということは解散後そんなに時間が経っていなかったはずである。

私は佐方の浜から佐方川口を上がるお宮の前より少し那波寄りの所まで帰った時点で、前方からの車のライトに照らされるのを感じ、その車が横の所で急停車したのにびっくり。中には父とアンパン先生(注記: 仇名と思われる。名は著者も思い出せなかったらしく、空欄のカッコが続いている)が乗っていて飛び降りてきた。

どんな対話をそこで交わしたか定かでないが、恐らく経過を話したと思う。まあ良かった、ということになって、そこでアンパンと別れ、父と共に帰った。家ではその後の経過シーンについての記憶はない。

翌日は休業ではなかったかと思う。ところが次に登校した最初の日に、担任の平手から呼びつけられ、放課後ひどく叱られた。平手先生は英語の担任で、双方信頼関係にあったはずであるが、この時以降私は彼が嫌いになってしまった、別に責め立てなくてもいいのではないかと思ったからである。始末書か何か取られたようにも思う。

それにしても、この事件は一般には内々に済んだことだろう。勿論、新聞記事にもなら

なかった。教員間ではどれだけ問題化したかは知らない。何もなかったのではないかと思う。アンパン先生は一行の首席引率者であったはず。心配して佐方まで車で飛ばしてきたのである。父もビックリしたに違いない。

しかし、私が思うに、どうして先生が早々と家まで来たのだろうか。当時は電話もないから一つの手段ではあろうが、私が一行より一足先に帰ってしまうはずはないではないか。遅れたに違いない。それだったらどうして大阪駅に誰かを待たせなかったのだろうか。改札口を通るはずだから、そこへ駆けつけてくると考えれば何のこともなかったはず。又阪急の屋上では何人かの級友と一緒にだったので、皆集合した時に「奥田と行動を共にしていた者はいないか」どうか尋ねてくれれば、知っていると答えた者がいるはずである。

当時の校長は厳しいことで有名な松本だったので、引率の先生たちが大事を起こしたことを生徒たちに隠そうとしたに相違ない。わかったら、そして大事に至ったら処分されるから、それを恐れたのではないだろうか。平手先生もそのことは校長に隠して、事なかれにしたに相違ない。その辺の手違いがありながら、爾後的だが、私は平手さんからひどく咎められた。私にも言い分はあった。

実は、前日の東海道線の夜行の旅では、私はほとんど眠ってなかった。皆が富士山が見えると騒いでいた時刻には車両を前後駆け回っていた。熱海あたりから積み込まれたであろう駅弁（夕食）がどうしても足りなくなった。誰かが 2 個食べたか、数え間違っって受け取ったか、足りなかった。引率の先生の一人、教練の青山が、私に探せと命じた。私は、分散して座席にいる同僚に、席ごとに弁当は余ってないか尋ね探し回った。皆そういうことに無関心だったか、銘々自分の興味に熱中して、余るという者はいなかった。

私は、列車の前から後ろまで何回か往復して探し回り、遂に諦め、くたくたになって、夕食を欠くことになった。中隊長の罰というのかどうか、そういう前日の夜であった。阪急デパートの屋上のベンチで仮眠に陥ってしまった関係的条件は十分にあった。せめてそのことは平手さんにも言い訳したかった。だが、それは理由にならないかの如くであった。

ともかくこの事件は、私にとっては今も心の傷として残っている。(昭和 60 年 5 月 18 日)

16 : 佐方の家族、刀出の父

佐方奥田家における私の生活は正常な家庭生活というよりは、むしろ間借人的ですらあった。家族間のスキンシップというような対話はほとんどなかった。必要最小限のあれこれの発言で用を足した。

中学の 4 年間でもそうであったし、高校は下宿したし、大学は九州に離れてしまっておさら遠のいた感じだった。最小限の口数、他意あってではなく、なんとなくそうなったのである。

私が佐方に行く話を、繁之助から聞いた時（昭和 9 年の秋、初治一家が打越の祭りに来

て、新治(注記:養母春雄の父、新治氏)との間にほぼ話ができたといわれている)、父は初治の長女幸にめあわす予定という話だといったので、そのことが私の耳に残っていて、幸とその後同じ屋根の下で暮らしても何となく、その意識があって、スキンシップな話を交わす気に遠慮があったのだろう。

敏子は子供だったので、背に負って子守役をしたことがあるくらいで、彼女は私をよそ者と知らないようであったので“隔意なく”話せた。和子はどういうこともなく、普通に歳の差ある男女でしかなかった。

幸の場合は、これまた4年生という子供だが、なんとなく意識していたようだ。私は食事を済ませると、夜はすぐ“私の部屋”座敷に引っ込んでしまって机に向かって、キングン実直に勉強の態勢に行くのが平常だった。幸は、自分に課せられた食事の呼びかけを敏子にさせ、敏子が「兄ちゃん、ごはん!」と告げに来た。和子が稀に、幸自身はもっと稀だった。これまた、そんなに理由はなかったと思うが、幸が敏子に命じている声が、私にいつも聞こえてきた。

母は仕事のことでは対話の相手であったし、噂話など独り言のように私によく語ったが、親密と言えるような正常さはなかった。どこかに、隔たり又は遠慮があったと思う。

父に至っては、村の青年に語りかけるような調子で、やはりどことなく他人行儀な響きがあった。私の散髪はいつも父がした。バリカンで丸坊主にし、襟を剃刀で揃えるということだ。そうした作業の中で、父はあれこれ噂程度のことを語りかけたり、社会一般についての自分の意見を述べたりした。記憶している父の話は、上級校への進学についての自分の意見である。会社から帰りざま、私の頭をつかみながら、進学は希望としては陸海軍の学校が学費がいなくて済むが、他は学費がいる。中学5年からだと高等専門学校がある。軍関係の学校は身体条件で無理だろうから、専門学校がいいのではないかとの意見であった。高等学校に行くと、さらに4年の大学コースに進むしかないので、これは学費が一番かかるというふうな説明であった。3~4年当時の私には、特別の希望のない時代であった。中学校の授業料でも、当時、一か月のおかず代が月末払いで10円の頃で、5円もかかるから負担に感じたに違いない。中学校卒業のまま就職することも構わないが、よくできるほうなので上級校への進学はやむを得ない、むしろ喜ばしいと思っていたに違いない。まずは成り行き次第というのが実態ではなかっただろうか。

こういう雰囲気の中で、私は中学1年の時か2年の時か、正確な記憶はないが、母に「学校を止めて、刀出に帰る」と悲愴な覚悟で発言したことがある。理由は今はわからないが、多分我慢できないほどさみしかったのだろうと思う。母はびっくりして、父にそのことを告げたようだ。気に入らんことがあれば言えばいいし、どうしても帰るといふなら仕方がないけれど考え直したらどうか、が一寸間をおいての母の応答だった。私には特別の理由はなかった。争点はなかった。結果は無言のまま日時が過ぎただろう。何だか冷たい空気の一時期が流れたようだ。刀出に帰った時、実父は、気に入らないなら帰ってもいいと言

ったことがある。勿論そのために私の発言があったわけではない。

繁之助は、良くできる子を養子にやっちゃって惜しいことをしたという潜在意識があったに違いない。この子なら引き戻しても、自分の手で立派にして見せると思ったかもしれない。私が刀出に行くと、庭で遊んでいるニワトリを絞めて、カシワのすき焼きをしてくれたことが何回もあった。私はそうした大層なことをする父の気持ちには感謝しつつも、そうした行動は好きではなかった。

3年生ぐらいの時だった。ある日、龍野中学校の正門前に、父がうずくまって私の下校を待ち構えており、そっと饅頭を出して「食べよ」という。そして、「あまり勉強はするな」と言った。その後どうしてどう別れたか覚えていないが、多分彼は一杯飲み屋に行くといふので10分程度の立ち話しかしなかったと思う。でも刀出から龍野の西の端まで歩いてやってきたことは間違いない。淋しがっているわが子を不愠に思って、いたたまれなくなって「面会」に来たのだろう。そういうことをせずに、佐方に来て一日でも二日で泊っても帰るという方法もあったはずなのに、そういうことは一度もしていない。

彼は、佐方奥田に対して何か不満な一物を腹に持っていたようである。それが、私の学徒動員を前にしての、幸との結婚式の日に爆発したのではないだろうか。この日は、昭和18年10月30日である。酔っ払いが何やら大声で怒鳴っていた。家計不如意の自分が、父としての対応をしてもらえないということで、深く大きなコンプレックスを持って、奥田初治氏を見ていたように思う。後で七二兄に聞いたところでは、養子にやったらその時に、又結婚させるならその時に、それ相応の結納金にまつわる礼をするのが当然と、繁之助は考えたが、初治はまるでそれらしい礼をしていないようだ。「猫の子でも……」とか「貧乏人だと思って、見下げて……」というようなことを口走っていたように思うが、繁之助は心に思っている、言葉に出して相手には言わなかった。それが、私が佐方に行って以来、ずっと根にあった感情だったようで、彼が佐方に来て泊って、私を交え、奥田の家族と父親らしく語って帰るというようなことは一度もなかった。

初治の方もそれを要請するようなことはなかったのではなかろうか。そうした冷たさが、両家の間にあったことは間違いない。ただ、私について言えばそのことがどうということはないし、むしろ無関係であってほしかった。(昭和60年5月19日)

17：姫路高校受験へ向けて

中学4年の時、上級学校の受験ができるのが陸軍士官学校と高等学校（又は大学予科）だけであった。陸軍には寸足らずだから高校しかない。父は大学までの気はなかったので私も高等商業ぐらいかなと思っていたし、それなら5年生でしか受験できない。

でも、4年生で受験挑戦の必要があったので、近くの姫路高等学校に目標を定めた。

入試が何月何日だったか記憶にない。2日間だったと思う。その年、1月初めから猛勉強入り、1日6～7時間の睡眠、中学校も1月末になるとかなり自由授業のようになっていた

のではなかったか。中間考査、定期試験がどうだったか全く記憶しない。入試一途に毎日を賭けた。座敷のに入った右の隅が私の勉強机。金属製の置火入れ、足温器に毎晩豆炭をおこしたのを入れて、母が持ってきてくれ、その上に足袋をはいた足を置くと丁度寒さを防ぐのによかった。膝かけを使って膝を温めると、これまた防寒によかった。

中学校の時の通信簿がある。これを見ると、3年と4年の2カ年しか記入がない。1~2年は古い様式だったのでのっていない。新しいものになったのである。これを見ると、例えば終身は1学期93、2学期も同じ、3学期の記入はなく、学年平均92となっている。公民は85、90で平均が89ということだから、3学期はいずれも悪かったのである。漢文は1学期93、2学期90、学年平均89、これまた同じく成績は落ちている。体操は85、85で学年87とある。ぐんと上がったわけである。武道も79、75、77だから、これまたかなり上がっている。3年の1学期、2学期、学年及び4年の1学期、2学期、学年の順に総平均を見ると、88、90、90及び88、89、89となっていて、席次は全部首席。4年生の欠席日数9とある。休んだ記憶はない。病気はしていない。とすると受験のため学校に行かぬ日がこれだけ続いたのであろう。(昭和60年6月23日)

18: 学資負担とアルバイト

旧制の高等学校から大学へ、学資を支弁する親の負担は尋常ではなかったに違いない。農業片手間の工場労働者としては負担は重すぎるだろう。父がその道を躊躇したとすれば、それなりの事情があったと思う。賃金収入の半分を教育費に充てるのはつらい話だ。山や田を売らなければならないかもしれないのである。

父は姫高への汽車通学を私に勧めた。やむをえないと私も思った。だが、それどころか、1年生は全員入寮との指示がでた。寮費負担が不可避となった。父にとっては重圧だったに違いない。反論もできず、辛かっただろう。

姫高2年になり、汽車通学かなと思っていた矢先に、中学校時代の戸田先生が、姫路五軒邸に豪邸を構えている福永さんの長男の同居家庭教師になってくれとの依頼が飛び込んできた。OKである。条件は一部屋使用と朝夕食つき無料、そして中食費として月10円支給という。家庭教師的な仕事は随時任意で、時にテキストのどこかを教えてくれればいい、同じ屋根の下に学友の形で居てくれればそれでいいということだ。彼の名は裕だったか。弟、妹ありで三人兄弟、母ありで父は死亡だった。私は父の代わり、兄の立場ということになる。その家から姫高までおよそ10~15分の歩行で通学できた。実に好条件が降って湧いてきたわけである。大学の時もパヨン君(注記:パヨン・シュティクル氏。タイからの留学中の同期生。戦後駐日タイ大使を務めた。著者は、大学から現在の言葉で言うチューターを依頼され、答案作成練習など学業支援にあたった。)の学友として依頼され、生活費の半分は補給してもらったのだが、高校の時もこうした事情で生活費は親の負担なしという状況を得たわけで、その点私は紹介して下さった先生にまず感謝したい。心配した養父に幾分なりともお手伝いで

きたと自負している。

(平成 10 年 5 月 2 日)

19：高校時代の劣等感経験

高校時代は劣等感に押されることが少なくなかった。中学校では平均水準よりも 2 年遅れての入学だったし、成績も負けなかったのに、劣等感など全くなかった。高等学校生活では逆転してしまった。事ある度にそれを感じた。

英語の多田先生から突然指名されてテキストを読み和訳することになったのだが（予習していなかったこともあり）立ち往生した。先生は「フン！君は慶応か早稲田に行っていた方がよかったね。」と皮肉られた。姫高の席を汚すのは勿体ないというわけだ。寮生活というものは予習する時間なんて取れないことが多い。平素の教科学習にしろ運動部生活にしろ、寮生活にしろ又市街に出て遊び歩く場合にしろ、私は事ごとに劣等を感じた。食べ物も周囲の人の好み、知識にはかなりな距離があった。当時は映画が大きなウエイトを占めていたが、みんな何が何だと良く知っている。また、洋画についても詳しい人がいたし、その一般関心にはとてもついて行けなかった。俳優・美人についても詳しい人、私はとても話題の中に入れなかった。知らないのに分かっているふりをするほか交友の途はなかった。生徒の多くは神戸、大阪、京都の育ちで平素から身につけている。それに比べ当方は育ちが「田舎」というか余暇・仕事も農村そのもので、いわゆる都鄙の落差である。流行歌・歌劇についても当方は無知そのもの、それに盗み読みするように（授業中にすら）岩波文庫をいつも手にしている者が少なくない。トルストイ、ドストエフスキー、ゲーテ、カントなどなど。同僚の中で文学・哲学それに洋画・洋曲が話題になる。

私は人の後ろに隠れている以外にない事度々だった。中学の時と世界が違う。水準が違う、広さも深さも。だから人格も違う。教養があるか単なる生き物か、毎日頭を殴られっぱなしのようで、どの分野でもいい、どの程度でもいい、追いつきたいとの焦りの日々だったように思う。平常な人間になるための試練の期間が必要のようだ。

(平成 10 年 5 月 2 日)

20：九大法文学部経済科へ

高校も 3 年の最終コースに入ると、大学受験が話題になる。入試準備した人もあったようだ。私自身そうした記憶はほとんどない。英単語を少し多く覚えようとしたり、西洋史をちょっと詳しくやっておこうという程度で真剣味は高校受験の時と比較にならなかった。どこかに入学できるという気安さがあったに違いない。クラスの過半数は京都に決めてかかっていた。

私は受験準備をろくにしていなかったくせに東大を志望した。果たして、英語も難しかったし、歴史は全く山が外れ、いい加減な解答をしてしまった。合格発表があるまで数日空き日があったので、龍中、姫高陸上部の先輩で、当時、東大医学部に行っていた中井さん

の宿所にお邪魔したり、伊豆旅行をして時間を費やし、発表当日、夜も暗くなってから見に行った。黒山のようにたかった受験関係者の中を掻き分けるようにして自分の名を見つけようとしたが見つからなく、気落ちして姫路に帰った。確か合格者名が小さな洋紙に書いて貼り出してあったので、マッチを擦って名列を辿ったと思う。

この頃はクラスメートも散り散りばらばらであった。

高校では二次試験を受ける者の案内はしてくれていた。願書の所要に応じていたわけだ。岩田に会って意見を聞いた。佐方の父は、医大でいいなら岡山医大に行くのが良いといったが、私は岡山は近いので、いっそのこと長崎にと考えていた。同クラスの者で医大にコースを決めた者も既に何人かいたようだ。岩田は京大経、この大学はほとんどが無試験同様に入学できたらしい。東大でも文学部は無試験であった。私が受けた経済学部は2.5倍ということであった。ともあれ、自分の力を知らぬ冒険をしたものだ。同じ東大経でも商学科は無試験のようであった。

そういうことで岩田と話し合ったら、彼は経済学をやるという初心を貫くべきで医大に行くのは賛成できないという。俺と異なる道を進むことになるのではないかというのである。と言っても、経済学をやるにはどの大学があるのかというと、東北も九大も二次募集はしていると、彼の方が情報通であった。私は、当時九大のような法文学部は経済学を包含しているとは思っていなかった。岩田は九大が良いと主張した。私が九大受験を決意したのは岩田の説得による。佐方の父にどう言い訳したのか記憶していない。急いで九大に願書を出し、九大に受験に行った。私の記憶では、入試は英語だけだったと思う。受験してみると、姫路で内山さんから習ったマーシャルの限界効用説のエッセンス部分の訳が問題に出ていたので、東大の時とは反対にスラスラ答案ができた。こうして九大法文学部経済科に入学することになったのである。

経済学を選ぼうとした私の動機は次のようなものであった。

五軒邸から遠くない古本屋から買った「社会思想十二講」というのが、ひどく私を感動させ、その中で何よりもロバート・オウエンについての解説に魅せられた。マルクスの剰余価値説よりも、オウエンのニュー・ラナークの実験の方が遥かに吸引力があった。クロポトキンも面白いと思ったが、何といてもオウエンが最高と思えた。オウエンのような人間になりたい。腹の中でそう決めた。何も分かってないのにそう決めたといえるだろう。そうした時に、私は西尾君と論じ合うチャンスがあって主張したのであった。西尾は社会正義を貫くには、法律の勉強を基礎とすべしと言い、私は経済学だと言って譲らなかった。当時は軍国主義に知らず知らず傾いていて、満州に王道楽土が建設されようとしているのだと考えても見た。そこで自分もそういう社会の建設のチャンピオンになってみたいとすら思ったのである。大学で経済学を、中でも社会思想史を勉強したいと思ったのは、この辺に源を発しているといって過言ではない。何も分からないままの信念が、こうして出来て行くのかと思うと、人間の縁というものは恐ろしいものだと言わざるを得ない。

(昭和 61 年 2 月 19 日)

21：九大おける学生生活

九大の学生生活は、実に物質生活に恵まれなかった。衣料切符が全国民に配給され、1000点だったか、その範囲の衣料しか買えなかった。レインコートがなかったので、それを求め、切符の点数を 3 分の 1 も使ってしまったことが思い起こされる。尤も、節約すれば事足りたと思う。

しかし、食糧については節約というよりは食欲の方が上回った。大学の食堂は切符で食べた。カネはあるけれども切符がなかった。切符なしで食べられる所もあって、そこに列を作って並ぶこと二度、二食分を食う例も少なくなかった。昭和 18 年はそういう年であった。

佐方に帰省する時、呉服町の明治屋にバターを売っていると、岩崎友四郎（弥太郎の孫でサンキューアパートで知り合った経済学部同級生）が情報を入れてくれたので、飛んで行って買い求め、佐方に持って帰ったことがあった。残念ながら、佐方では食べ方にも慣れてなく、あまり喜んでもらえなかった。田舎にはそれなりの食糧の充足はあったのである。

ひどい学生生活のためか、私は痩せこけていた。九大図書館の横の青草の上に横になっている写真があるが、病人さながらである。体重も 50kg を割っていたと思う。それでも勉強はしたつもりである。法文学部に近い図書館にもよく通った。単位はがつつ取った。そのため 18 年 10 月までの 1 年半、3 回試験の中で卒業に必要な単位数は充たしている状況だった。ここで学徒動員になって、兵役のさなか 19 年 9 月には「仮卒」の証書が自宅に郵送されるが、私は単位だけは卒業資格を取っていた。（仮卒の資格単位数は 3 分の 2 ぐらいだったと思う）どんどん単位を取ったので、成績は必ずしもよいものではなかった。当時の状況では止むを得ないだろう。

ゼミは森耕二郎教授の社会政策を専攻としておったが、その傍ら三田村一郎教授の東亜経済政策にも参加した。前者は労働問題、後者は植民地政策といえるものであった。

「印度経済論」なるものを視野に置いたりレポートを作った。社会政策の方は、相生の播磨造船所の労務管理をテーマにレポートを作ったが、視点がぼけていたのではないかと思う。大学では又教育学の講義を聴いたり、フランス語、中国語、イタリア語を一寸だけかじった。長続きもせぬ聴講だったので、全くものにならず、うどん屋の店先を通った程度しかなかった。憲法は勿論、民法、刑法の講義も聴いた。憲法以外は単位を取っていないが、不破刑法はノートもきれいに取って面白く聞いたものだ。経済学では岡橋貨幣論を一度不可を取って、再度受け直し、良を貰った。

戦争がだんだんひどくなってゆくにつれ、大学生も「勤労奉仕」に出ることがあった。宇美だったか、夏の暑い日に麦刈に行ったのと、飛行場づくりに出て土運びをしたことが

あった。ほんの一日だったが、体力がなかったせいか、ひどく疲れを覚えた。

飛行場づくりは「モッコ担ぎ」だったが、これで飛行場になるのかなと思った。中食に藁で作ったパンが出たが、食べられるものではなかった。九大農学部の教授が藁からパンを作る方法を開発したとか報ぜられたことがあったが、これとの関係があったのかも知れない。九大の先生がこうした戦争時代に何を研究していたのか知らない、が既に国民服というのが流行っていて、それを着用して来る先生もいたし、講義の前に拍手を打って東方遙拝をする先生もいたのは確かだ。三田村先生が国民服を着ていたのは覚えている。

我々が旧制高校3年までやったのが最後で、次の学年は2年半で卒業になった。だから、昭和17年4月入学の我々に対し、下の学年の者は、この年の10月に入学してきた。学年短縮が押し寄せていたのである。そうこうしているうちに、理系の一部(?)を除いて、文系は全部「学徒動員」令が敷かれ、我々は昭和18年10月、入学1年半にして徴兵検査を受け兵役に就くこととなった。動員が、次の学年、その次の学年にどう適用されたのか、理系や研究室のどの範囲にまで免除されたのか、正確に記する力は今はない。ともかく、我々は10月までということになった。このことが夏休み前にはもう分かっていたので、この年の夏休み帰省は、最後のそれであった。

22：八二と幸の結婚の経緯

佐方では、義父、義母の間に、私に結婚するよう奨める意見が抬頭していた。

夏は米飯をショーケに取って、風通しの良い場所に吊り下げ、米飯の耐用時間を長引かせる。又は、籠の中に入れて紐で井戸水近くまで垂らし、冷温に少しでもさらすのである。休みで帰省した私に、ショーケの飯をつぎながら、養母が、動員も決まったし戦争に行く前に結婚してほしいと提案した。恐らく、義父がそう言わせたのであろう。自分が造船所に出勤している留守中のことになる。そして義母が言うには、嫌でなかったら、幸を貰ってくれないか、との提案なのである。やや考えて、私はそれでもいいと言った。そう言われる予感もしていたし、嫌だという相手でもなかったからである。

しかし、この夏、私の心は急に胸騒ぎが続いた。ある夕暮れに私は、幸を誘って奥の田んぼ道を二人で歩んだ。二人とも口数は少なかったが、とうとう来るべきものが来たという観念は共通だったろう。それに二人とも拒否の気持ちは全くなかった。ある意味では、将来を誓い合うような気分が両者の間に流れていた。口数はほとんどないし、何を言ったか覚えていない。しかし、認め合った仲となったようだ。

昭和10年の1月から18年8月まで、二人は同一家族だったわけで、同じ釜の飯を、同じテーブルで食べてきた仲であるが、二人の間には対話はほとんどなかった。まだ少年ながら、私は刀出から佐方に行く時に、父から将来はそうなる旨を聞かされていた。満で14歳の私が否応と言うはずはないが、だんだん物心も細かくなってくると相手のことを考えるようになる。思うようになればなるほど、意識して語りかけることを抑止したのも確か

だ。どうしても必要な対話や意思疎通は、義母か二人の義妹が仲を取り持ってくれることで済ませるケースが多かったし、努めて物を言わないで済ませていた。龍野中学の4年間、その初めの頃は、彼女に夜、数学を教えたこともあったが、間もなくそういうことはなくなった。相互に相手を意識したのであろう。この4年間、私は中学校から早く帰ることに努力し、農繁期は特に夕暮れまで野良着に換えて、農業労働に参加し、農業の担い手である義母には感謝してもらっていた。彼女も手伝いはしたが、主として家事方面で、この4年間に田んぼに来ることはなかった。朝食は別時間が多かった。夜は私は机にかじりついて、ほとんど離れず、家族との対話は全くなかった。そういう生き様であったので、彼女と話さねばならぬ必要はほとんどなかった。姫路高の3年間、九大での1年半、この4年半は共通の生活をしていなかった。帰省しても、私は自分で勝手な時間の使い方をしていたのである。

月日の順序は私の頭で正確に位置付けできていないが、義父の方からの働きかけで、幸は小倉の樋口さんという家に家事見習いに来ていたことがあった。小倉の富野である。

小倉の義叔母は、私の最初の九州下りの時に下宿を福岡春吉に探してくれたし、その後も時々九大生として義叔母の家に遊びに行った。そうしたある日、富野から呼び寄せられて、私と幸が面会することが一度あった。彼女が上郡高女を卒業して後のことだし、私が九大生になって後のことである。昭和17年から18年にかけてであろう。結婚話が持ち出されると聞いたのは、この義叔母からであるし、「学徒動員」が確実にになった18年の春から夏にかけてのことであろう。何か月かの家事見習いの後、このことのために、義叔母に再び口をきいてもらって、樋口家から佐方に幸は既に退きあげていた。

(昭和62年12月24日)

23：養父初治の陸軍の勧め

この夏休みが終わって、私は福岡に引き返し、九大での最後の試験に対応した。どんなにか多忙であった筈であるが、全ては忘却である。ただ、何日も何日もサンキューアパートで岩崎と来るべき運命について語り合った。岩崎に結婚の話も漏らした。彼は格別驚きもしなかった。むしろ喜んでくれたほどである。

試験が終わり、仮卒業も決まったが、私は佐方へ帰る気は余りしなかった。結婚とか徴兵とか、将来を考えると気分はむしろ重かった。

徴兵検査は多分10月1日、姫路の公会堂が会場だったと思う。その前に、陸軍でも海軍でも、どちらかは本人の選択に任せると言われていたので、海軍に行きたいと漏らしていたのであるが、義父はこれを聴いて反対した。反対の理由はこうである。「自分は海軍の現役下士官の道を歩んできた。だから言える。船は運命共同体であり、それが沈没する時は一人の力ではどうにも助かりようがない。陸軍だったら、努力の余地がいくらでもある。なのに、何も好んで海軍に行く必要はない」と。私は陸軍を選んだ。

12月1日、福井県鯖江連隊に入営と決まった。当時は大阪の中部軍直轄の毒ガス連隊である。関東、満州と鯖江と、当時日本の陸軍に三つの毒ガス連隊があり、その一つに入ることになったのである。毒ガス連隊とは、〇秘であり、外向け、迫撃連隊といわれていた。

(昭和62年12月24日)

姫路近辺の人達がみんな姫路師団配下の連隊に入るのに、なぜ私が福井県鯖江に入るのか、理由は今もって明らかでないし、推測することもできない。くじ引きのようなことだったのかもしれない。しかし、義父が陸軍を選べと言ったこと、結婚をしてから入隊せよと言ったことは、一つの確乎たる立場からの主張であることが分かるし、私のその後の生涯を決める岐路を指していたともいえる。

海軍でなく陸軍と言ったのは上記のような理屈によるが、その主張の背後に日本海軍の連戦連敗という事実があったことを見逃すわけにはいかない。船なしには戦ができない日本でありながら、当時日本の船はアメリカ軍に見つかり次第、どんどん沈められていた。軍艦であろうと否とは問わない。

軍の輸送船で南方戦線に補給される兵員、軍需品は次々に海の藻屑と消えていた。南方要員となることは陸軍でさえ死を覚悟せねばならなかった。新京の経理学校を出て南方に送られた同僚で沈没死した者も少なくなかった。むしろ海軍の方が安全とさえ言えた。なぜなら、当時海軍は手も足も出ない戦況のもと、艦を港につなぎ続け、上陸して迎撃することさえ考える状況だったのである。

義父の「結婚しておけ」との主張は、こうした状況の中でのもう一つの選択であった。つまり、当時、兵は消耗品とさえいわれ、生命は鴻毛より軽く考えられた。兵も上官も同じくそう考えた。そうした中で、戦後の事情への配慮が既に講じられ始めていた。というよりは明治以来の日本の兵員政策の基本を流れていたと言ってもよかったと思う。

つまり、「後取り」保存策である。養子、長男、妻ある者はそうでない者よりも配慮が加えられる風潮があった。尤も、軍役犠牲者が有配偶者である場合の方が、国が援護する費用がかさむという財政上の理由があったと言える。ともかく、いわゆるチョンガーは兵員としては消耗品扱いされて前線に出され、有配偶者、後取り、子ある者は比較的の後方要員に回された。そのような法律、規則があったとは思われないが実際そう扱われていたことは周知の事実であった。

義父はそのことを知っていた。私は養子であるから、他の人よりやや有利であろう。その上、有配偶者であればもっといい。そうした計算が成り立つ。だが、当人たちにとっては事情は違う。配偶者が留守番し、結婚し直すというような選択の自由が奪われることもあり得よう。往く者にとっても配偶者にそういう心配と不自由はかけたくないとの配慮もわく。どうせ往くなら自由な、独り身で往きたいとの思いもあったのである。

(昭和62年12月25日)

24：八二の軍隊生活の諸相

残念ながら 12 月 1 日の入営のシーンについては定かな記憶がない。はなむけの宴を佐方でしたか否か覚えていない。相生から福井県鯖江まで列車で行くのだが、大阪乗り換えである。義父と幸が、付き添って見送ってくれたとの記憶がある。前日三人で鯖江の旅館に 1 泊し、翌朝 10 時頃営門の所で二人に別れを告げ、第二中隊に案内され、以後営内の人となった。

われわれは二等兵（星一つ）、班長は確か水野といったと思うが、伍長だった。中隊長は岡田。古参の兵としては上等兵、兵長がいて一つ一つ指導した。

点呼、兵器の手入れ、食事、後片付け、就寝、起床、歩哨など軍隊特有の規律の中での毎日である。内務と総括されるこれらの生活を通して鍛えられ、演習、教練という操兵の日課も当然に毎日続いた。操兵の中味は、主に歩兵レベルというか基礎的なものが多かった。我が中隊が戦車を操縦するという事は後で知った。兵器庫には、戦車あり、トラックがあった。そうこうするうちに、毒ガスについても教育を受けた。マスクの扱いから始まる。戦争に入ると、トラックで毒ガスを運搬する。敵前展開になると、戦車がガスを充填した後車を牽いて敵中に入り、後車がガスを撒布する。そして引揚げるという仕組みである。兵科としてのこの中隊に残るなら、トラックの運転、戦車の操縦についても技能訓練を受けるはずであった。

だが、聞くところによると、この頃すでにガス隊としての編成に変化があったようだ。第一中隊の方は、毒ガスを迫撃砲に仕込んで、それを敵中に打ち込むことを本命とする部隊で、ガスの操作というよりは迫撃砲の操作が訓練の主体をなしていた。迫撃砲の移動にはトラックが用いられるが、戦闘の展開には砲の分解搬送が必要で、これが訓練の中心となる。間もなく、毒ガスは扱わないようになったようで、我が中隊も迫撃砲操作が訓練科目に取り入れられるようになった。この段階で、迫撃砲は径 100 ミリ散弾を敵中に山なりに打ち込むという戦いの展開をする部隊に変身したのである。砲の分解は砲身、脚、衛板の三つの部分になるが、どれかを敵前で一人で担いで走る。そして組み立て、撃ち又分解して搬送する。30kg 前後のこの砲の部分の部分を担いで、100 メートルも走ると息が切れそうになるものだ。

内務には炊事当番というのがあって、毎日の定刻にアルミニウム缶バケツを用いて、飯、汁、菜を炊事場から運び、班内テーブルの上に配膳する。誰のが多いとか少ないとか、皆が横目ながら注目した。欲望は食べることに集中した。班長には別の盆に載せて班長室まで当番が運んだ。兵長がこれら全てについて兵と起床を共にし、やかましく監視指導した。食べることもさることながら、自分で洗濯も靴磨きもせねばならず、手入れが行き届いていないと兵長から突かれ、時には叩かれた。服のボタン付けは絶対だし、服が汚れぬように襟布を使用し、これがカラーの役を果たしたが、これが汚れていて叩かれるケースが少なくなかった。ハンカチも点検があって、汚れがひどいと叱られた。ハガキ、手

紙は検視された。日記も書かされ検閲された。

私にとってはこういう軍隊生活はつらいものではなかった。大抵、他よりも動作も早く正確で落ち度が少なかった。まずまずの評価を上官から得ていたと思う。夜は10時消灯、朝は6時起床、洗面、6時半点呼、7時朝食、7時半日課始まりということの繰り返しだった。夜は6時夕食、手入れ、7時半から自由時間といった具合だ。日曜日に外出を許可されることは余りなかったように思う。月の給与が13円50銭だったかな。この金は当然に余って預金できた。

「面会」日は日曜日だったろう。班内で雑用していると、“〇〇二等兵面会”という連絡がある。ニコニコ顔で営門近くの面会場に行き、木製の長椅子、テーブルを使って1時間ぐらい面会してお別れする。家族が食べ物を差し入れても、それを食ってはいけないことになっている。フンドシ、パンツ、ハンカチなど下着の差し入れは許される。週番将校が巡って来て、差し入れ食物を食っているのが見つかって叱られることも度々である。

鯖江にいるうちに、幸は三度ほど面会に来たと思う。敏子を連れにしたり、刀出の父と同伴したりだった。誰もこうした面会は嬉しいが、後は又厳しい内務に帰ることになる。軍隊にも慰安会というかコンパがあった。酒を飲み、菓子を食べ、若干の羽目外しの一時があった。日曜の前後あたりだったと思う。古参兵が歌など教えてくれる。

・嫌じゃありませんか軍隊は カネの茶碗にカネの箸

仏様でもあるまいに 一膳飯とは情けない

・月の影さす宮庭で 写真片手に目に涙

こんなよい妻持ちながら 一人で寝るとは情けない

・柳芽をふくクリークで 泥にまみれた軍服を

洗う姿を夢に見た ほんとにほんとにご苦労ね

この歌はどここの軍隊でも歌われたし、どれが正統でどれが替え歌か分からぬほど変種が多い。

屈辱的に苦しい時期は間もなく過ぎ去った。我々「学徒動員」組は、幹部候補生への道が暗黙のうち開かれ、志願書を出し、試験を受けて合格。よほど学生時代に悪いことがあったか、入隊後の失策がない限り合格した。正確な記憶はないが、明けて1月には一等兵、4月頃までに兵長に進んだ。幹部候補生と言っても、我々のグループは全て経理部幹部候補生というわけだ。各兵科、軍医科その他あったはずだが、我々は全部経理部だった。特訓を受けて期間短くて昇進した。襟章の横に座金つきの星が付き、襟章の下には薄紫のモール線が入る。ただ、そうした印は同級兵科の者より下という決まりになっていた。勿論、判っている限り、同階級でも任命月日の早い者は上官とみなされた。下の者が上の者に対してなすべき敬礼の風は厳しかった。

19年4月末から5月中旬だったか、我々経理部幹部候補生は大阪中部軍に配属替えになり、元の歩兵八連隊に寄宿し、毎日大阪城内にある中部軍内で経理学習を積んだ。勿論、

時には市中演習訓練もあり、淀川堤防を走ったことも記憶しているし、繁華街の歩行もした。経理学習は給与や旅費の計算、経理規則の学習だった。

その間に、伍長、軍曹と階級は進み、秋には満州新京経理学校への入学となった。列車で下関へ、そして連絡船で釜山へ、又列車で朝鮮を縦断、新義州、鴨緑江を渡って奉天を経て新京へ、何日間かの旅であったが、今は詳細記憶していない。大阪を出る時、軍刀（私物）がある方がよいというので、佐方の義父に連絡して軍刀を買ってもらった。丈も短いので、短目のものをしつらえた。80円ほどのものらしい。

新京緑園地区の経理学校に着いたのは7月上旬だったろう。間もなく冷たい風が吹いた。新京経理学校では第2中隊、第4区隊、第10班に所属、第8期生ということであった。区隊長は、湯村大尉といい、穏やかな人であった。ここでは本格的な主計官教育を受けた。勿論営外の演習もあったが、軍事でなく経理演習であった。作戦経理というが、どうも理解できず、想定の意味が頭に入らなかった。答案を書いても、模範回答から著しくかけ離れたものが多かった。未熟も未熟、実際の用にとっても耐えるものにならなかった。

(昭和62年12月25日)

25：日本の敗戦とその前後

敗戦色がいよいよ濃厚になってきた。部隊では帰郷命令も出した。兵隊に、故郷に帰って役立つものは何でも持って来いというのである。誰がどう帰郷したのか知らない。

しかし、兵隊が帰って鎌、鍬、鋸は勿論、日常の衣類、ローソク、油など、考えてみればガラクタだが、持ち寄ったのは事実である。不急不要といえど割烹用器も考えられる。私ども見たことのないような皿、小鉢の類がそうした蒐集品の中にあっただ。カボチャ、ジャガイモ、梅干、海苔などの食料もあった。だが考えてみれば、それが何の戦闘力になるだろうか。持ち出す方も、持っていかれる方もなんと切ないことであろうか。それに、隊長は家族を呼ぶのもよいと言った。嫁や息子に会っていいという。別の側面からいえば、最後の別れになるというのであろう。兵たちは悲壮感なく喜んだろう。

それを実行する人もいたようだ。だが、一寸間に合いそうにないことだった。祈りにも似た試みだろうがうまくいくものではなかった。このようなどん詰まりの中で、8月15日が来た。朝からのラジオは正午を期して重大ニュースがある、天皇陛下直々の放送があると報じていた。広島や長崎への新型爆弾の新聞記事は知っていたが、これが決定的なものだとの結びつきは誰も考えなかった。

鯖江に戻って豊橋に行くまでの間に、連隊長が将校会議でビルマにおける日本軍の大敗北について話した記憶が耳に残っていた程度で、後はどん詰まりの感があっただけであるが、「最後かな」の予感をした。

経理室の兵たちは15人ほど、皆、内野宮さんの庭に集まった。「玉音放送」が始まった。よく聞き取れないが、戦争は終わったという趣旨は良く分かった。誰も特にモノいわなか

った。「終わったのか」というため息はあるが、どうしようということは誰も考えず、言わなかった。8月の真夏のカンカン日照りの下であった。

この後、秩序があつてないようなざわめきが続いた。私は軍刀で青竹を切ってみた。これは持っていたら、占領軍に咎められるとの噂により、降伏の印に軍刀を投げ出す行事があつたみたいで、その時に供出した。ピストルも試みに一度は撃つてみたくて、経理室の前でドラム缶を的に実弾を一発放つて、それによって只の人になった。誰も彼も同じ人間に還つたのである。部隊が解散して、思い思いに目的地に向かうことになつたのは9月に入つてからだと思う。(昭和62年12月26日)

26：九大特別研究生として

そんなある日、三田村先生から手紙が来た。九大法文学部経済科の特別研究生のポストを開けておるので早く出校しなさいと言う。でも、なぜか私はそれにも食いつく気持ちが湧かなかつた。私を決意させたのは養父だつた。大学に戻るのが良い、生活費は何とかなるだろうと彼は言う。

特別研究生などというものについては予備知識はなかつたが、養父の積極性が私を動かした。私は応諾して九州に下ることにした。福岡に行く前に、幸同伴で川南(注記：著者が終戦を迎えた宮崎県の旧川南村)に行つた。内野宮さん宅(注記：著者の所属部隊経理室が置かれた民家)に4~5日お世話になつた。川南のトロントロンに、軍隊時代から懇意にしてもらつていた洋服屋明野氏に、福岡に行くことにしたが住む家はまだ決まらなかつたと話したら、明野氏は自分の兄が雑餉隈にいるから紹介しようと言つてくれた。この洋服屋にはリフォームの仕事を頼んで私の普段着とした。

雑餉隈の明野さんは我ら夫婦を気前よく迎えてくれて、4畳半の一室を空けてくれた。21年3月だつたらう。我々は九大の特研生として福岡県筑紫郡那珂町昭南町明野方の住民となつたのである。(当時は、鹿児島本線雑餉隈駅に近い、今は南福岡駅、福岡市博多区)人生かく転々。(昭和62年12月26日)

27：九大助教授までの歩み

大学特別研究生というのは、学生の身分である。手当は出るが、月給ではない。だからボーナスもない。代わりに学割が効く。戦時中、学生が徴兵免除されていたので、助手にせず学生の身分で研究に従事する途を作つた。その制度が戦後に生きていた。助手と助教授の中間の待遇という見当で手当が決めていたらしいが、戦後はベースアップもなく、手当が生活の足しになるには程遠かつた。戦時中は喜ばれ、戦後は好かれなかつたらしい。そんなわけで、「特研生」は前期2年、後期3年だが辛い立場にあつた。尤も、助手といえども高くない月給である。誰しもあくせくした戦後生活。

不平等とはいへ取るに足らない。懸命に努力してこそ、誰でもやっと食べたのである。

昭和 24 年から新制大学が発足した。新しい大学を目指し、どこも変身に奔走していた。八幡大学（注記：現九州国際大学）は大学の前は専門学校で、私は大学院後期ということで非常勤講師に 1 年間それも夜間部担当で山の上まで毎週通った。これも生活の一助ということだった。科目は社会政策、生徒に近づくのが好きだったので、すぐに慣れ親しみ、講義が終わってから、学生達の要請もあり読書会を開いた。ヒルファーディング金融資本論を輪読した。そうした中から、数人の熱心なのができ、島津登三君が今も私の身近で社会活動をしている人として指摘できる。

新制大学の発足に当たり、この八幡専門に就職しないかと、馬場克三教授が勧めてくれた。私は生返事していた。また、川口武彦氏の出身、松山高商（現松山商大）からも熱心に誘いがあった。松山に行こうかと心に決めかけたこともあった。そういう時に、九大教養部へという勧めがあったので、迷うことなく決めたのである。

25 年 5 月 13 日発令で助教授として久留米第三分校に赴任したのであった。その決定については、九大内部特に経済学部内部で曲折があった。森教授が松井春雄氏を推すのに対し、向坂先生が強く私を推薦してくれたということだ。特研究生で 1 年上の湯村武人氏が決まったよと報告してくれたのを覚えている。湯村氏は経済史助教授として半年前に赴任していた。私を推してくれて名誉に思う。特に向坂先生の強い推しには、今は感謝するしかない。

向坂先生は戦時中の追放解除により、「復帰教授」として、21 年か 22 年に東京から九大に来られ、住居は東京に置いたままだったので、集中講義が中心だった。高橋正雄、石浜知行を加えた 3 教授はその復学を歓迎された。もう卒業していたので、私は何回か学生に混じって傍聴したものだ。

田中定教授の下で研究する形式を取っていた川口武彦氏は田中先生の指示で向坂先生の秘書のような役割を果たした。研究室の管理も彼がしていた。先生の手紙処理や東京との往復旅行関係も彼が世話した。教授会レベルの仕事もあったのではなかろうか。研究室界限ですぐ彼と親しくなった私は、向坂先生の情報を念入りに彼から知らされたし、研究生活そのものも川口氏を通じて、向坂先生の影響を強烈に受けたのであった。

大牟田の倉永の妹さん宅（坂梨家）に寄宿されていた向坂先生を倉永に尋ねるチャンスも少なくなかった。営業成績が良いためか、立派な住宅で、高級住宅に接しえた私である。また、向坂先生は練堀町にも寄宿されたことがあり、その石橋邸は特急クラスの住宅だった。二階の広い二部屋を我がもののように使われていた先生を、多くの学者、労働者が尋ねたものだ。奥さん（ゆき）も何回か来福された。我々は、向坂先生からマルクス伝をドイツ語で読む学習会に、毎週石橋邸を訪ねる時期もあった。ドイツ語も練られたものなのである。東京世田谷の等々力にあった向坂宅に何回か行った。その関係で、藤沢に住んでおられた山川均先生を訪ねるチャンスがあった。向坂先生は後に中野区鷺宮に移られるが、いずれにせよ、今にして思えば豪華な邸宅環境を持っておられたものだ。本好きでいつも

周辺が書物の山、暇さえあれば古本屋を漁るとというのが向坂先生。甘いもの一点張りで酒タバコは全くたしなまない。タバコを吸っていた私だが、「地球を灰皿みたいにするな」という先生の言葉をよく聞いた。ぜんざい、餡餅など好物の最たるもの。「腹の中では、酒もぜんざいも同じ」と陰口を言う人もいた。

「資本論」の初版をドイツ語で手に入れた先生である。大牟田の古本屋にも一冊あって、見つけた先生が初版本の貴重さを言ったら、その本屋は家宝にしたいと言って手放さなくなったと話されていた。どこからどう迷い込んだ本だろうとのこと、日本で3冊しかないとのことだった。とにかく本の好きな先生。それと油絵についても詳しい。ヨーロッパ近代画については本職と劣らぬ評論ができる。画集の解説執筆もある。

その向坂先生が労農派の旗手であった。講座派に対抗して日本資本主義論争をしていたので、私も労農派になるしかなかった。山川氏を先頭に、大内兵衛氏、ついで向坂氏と言われた。森耕二郎教授のもとに社会政策を専攻すべく研究室に残った私だが、川口氏を介して向坂先生の門下生となり、講座派の森先生からは破門の宣告を受けたのだった。それまで私は森先生が講座派とは全く知らなかったのである。森—吉村—正田の流れが厳然と学部内にあり、若いものでは松井春雄氏、都留大治郎氏がいた。私は何派たるかの意識はなかった。ぼんやり者、お人好しと言われても仕方がない。道理で、このグループから冷ややかに接しられ、のけ者にされていたわけである。

1949年だったと思う、森先生が私の研究室（法文の建物の書庫で、金融関係の書物が並べてあった書庫の東南隅で中庭が見える三階にあった）に珍しく入ってこられた。酒気はもちろんあった。この先生は大学にもアルコールを持ち歩き、酒気なしにはおれない、かなりひどいアル中であった。部屋の私の掛けている机辺に近づくや否や「奥田君、君はもう帰れ、そして奥さんと仲良く暮らすのだ」という意味のセリフを残して出て行かれた。後で私は、それが破門であった事を理解したが、その瞬間はポケットとその言葉を聞くだけで、酔っての言葉としか受け取らなかった。多分森先生は、私が向坂派と行動を共にしているのが気に入らなかったのであろう。もし私がその瞬間、森先生の発言内容を正確に受け止めていたら、私は居たたまれなかつただろうし、本気になって九大を去っていくことにしたかもしれない。なのに、私はあの言葉を正面から受け止めずに不感症然としていたのである。だから、その後も配給の酒が貯まったら、森先生に送ったのである。古小鳥の森家に行っても、奥さんは構わぬ人で、座敷のテーブルの上には白く埃が浮かんでいた。又、偶然同時訪問となった吉村正晴先生は、私に一物あってか、モノも言わなかった。これら講座派の人達は原因が酒ではあるまいが早めに世を去った。

さて、私は九大助教授に推されるに際し、論文は？ということで、慌てて書いた。題して、「英国労働運動史上のチャーティズムの意味」だったかと思う。研究室で勉強すると言っても片や生活に追われ、労働講座に走り回る日常であったし、向坂先生、川口氏らとの付き合いもあって、ドイツ語の勉強、日本資本主義論争について時間を割くことが多かつ

た。だから、傍ら自分固有の勉強としてイギリス産業革命史、労働運動史を勉強していたのである。社会政策専攻の名の下、経済学分野に首を突っ込んでいたのである。勿論、経済学分野としては賃金論を基本としていた。資本論では「労働日」と一致する分野でもある。向坂先生の「地代論」は読みかじりに過ぎないと言える。

姫高時代にマルクス禁制下にあつて野里（現姫路市）の古本屋で見つけた一冊の本「社会問題十二講」（生田長江著）というのを熟読して、その中でロバート・オウエンやマルクスやクロボトキンなどについて一寸知っていたのが特研時代のこの研究テーマにつながる。この本で一番よく分かったし、面白かったのがオウエンの空想的社会主義で、マルクスの剰余価値（注記：説）は理解する能力を持ってなかった。専攻を社会政策とし、研究テーマをイギリス労働問題としたのも、この一冊の本と縁があるように思える。

注記：生田長江『最新社会問題十二講』新潮社（1919）

勿論、九大経済科にいる時に森教授のゼミに出席し、労働問題に手を染めたのも、オウエンの影響があったからかもしれない。理想郷の追求の夢がこういう形で実際化したと言える。学生時代にも相生の造船所の労働状況についてレポートを書いたこともある。又九州の炭鉱労働にも関心を持つことになった。戦争で一時忘れていたが、研究室に戻るようになった時、再び森教室の扉をたたいたのであった。そして特研生の中でマルクスに惹かれる傍ら、研究対象をイギリス産業革命時代の労働運動に、更に再びオウエンに立ち返ったのであった。ともあれ「労働問題」の周辺をうろついていたのである。

研究というもの自然を「遡る」という傾向を持つものだと思う。イギリスの産業革命時代の勉強をしていると、19世紀から18世紀、またまた遡り、14世紀のあたりまで行ってしまう。トーマス・モア、そしてエンクローヂュアについても興味を持つ。農業問題、地代など当然に対象になる。手工業、マニユファクチュア、友愛組合、職人団体も面白くなってくる。それらをぐるぐるやっているうちに、九大教養部に行くために論文を要請され、チャーティズムについて書くことになった次第である。原書ではハモンドのスキルドレイバラズ、タウンレイバラズ、時間をかけて読んだ。コールの労働運動史、ウエップの労働組合運動史などがよい参考になった。またMax Beerからは、その『イギリス社会主義史』を通じて特に指導を受けた。『A History of British Socialism』の日本訳である。平凡社の政治学辞典によると「イギリス社会主義に関する最高権威書、特に第3部においてチャーティズムを労働階級の最初の組織的政治闘争と規定したことは著名」と紹介されている。論文はそれを大いに引用、模倣したものになっていたと思う。森教授が、教授会で原稿のまま、それを推薦する台本にされたと聞き及んでいる。（平成2年1月15日）

28：社会主義協会の事など

総評が結成されたのが1950年の7月、その前5月に朝鮮戦争が始まった。社会主義協会が設立されたのが翌年5月。わが家の戦後史も、私の生活も、この頃から転機に入ったと

言える。向坂先生から紹介されて合化労連に行った。太田薫氏が指導する単産で、三田駅を降りて右へ折れ10分前からぬ所にあり、いつも沸いているように思えた。等々力の向坂先生の家にも何回かお世話になった。奥様が親切にしてくださり、当時まだ軍服を變形させて着ていた私の、その服のホツレを針で繕ってくださったことがあった。また、先生のお伴をして藤沢の山川均先生を訪ねたこともあった。多分この頃だったろう。山川菊枝さんは全国的に著名で、戦後できた労働省の婦人少年局長をされた。均先生は庭の草抜き姿が写真で残されているほどに地味であるが、向坂、大内、高橋、太田など社会主義協会設立の中の抜き出た指導者であった。

九大助教授になっていた私だが、ヒヨコそのものでしかなかった。向坂、高橋の二人は福岡における協会のオルグ役であった。メンバーを同人と呼んでいた。二人とも東京在住のままでの復帰教授で、同人会には入れ代り立ち代わり出席され、私達はその指導の下、同志を募り、主義主張の広報に努めた。協会は雑誌「社会主義」を発行し、我々は読者獲得にも努力した。最初の頃は高橋氏が近見敏之氏も近付けていたが、近見氏は55年に設立された生産性本部の九州の事務局を担い、我々から離れて行った。後に久留米市長となる切れ者であった。福岡での協会運動に労働組合側で力になったのが、福教祖の豊瀬禎一氏、電産の瀬戸口虎雄氏であった。白金町の電産九州の事務所は労働講座の場であり、我々のたまり場であった。天神の教育会館はもっと大きな役割を果たした。福教祖の三役室の一隅に机を置き、1954年に創立した社会主義協会九州支局が置かれた。当時は労働組合だけではなく、県の労政部からも声がかかって多方面に労働講座に出向いた。総評や左派社会党が平和三原則、四原則と掲げて活発に動いていたので、その代弁者みたいでもあった。

それから思い出すのは向坂先生が平和革論を展開していたのを下請して力説もしていた。「平和革命の必然性」というのが、今でも先生の持論だったのが忘れられない。戦後2年ほど経って「改造」（ではなかったか、その種の雑誌）に向坂先生がそう題する論文を書かれ、「必然性というのはおかしいではないか」と批判する人も少なくなかった。革命は必然かもしれないが、平和運動と言えない状況になるかもしれないのにとの立場である。私はその点に深く立ち入って述べたことはない。 (平成2年2月25日)

29：知事退任前の健康状態

思いつくままに綴っているので、ここでは私の健康又は命のことに触れてみよう。

今年11月には満74歳になる。知事選出馬すべしとの声もあるが、近年とみに健康上の自信の喪失、体力の減衰を感ずる。知事職が激務だということも一面あるので、もうそろそろこの12年間の身辺整理に入らねば、無秩序の放任状況が続きすぎ身辺混乱がひどすぎる。

さて、ざっと言って自覚的な病状は特にないが、あえて言うと、皮膚全体が痒み斑点到に蔽われている。両足が特にひどい。肝炎との関係ではないかと思う。いくら薬（軟膏）を

用いても一向に良くならない。済生会福岡病院の皮膚科も特にかまってくれないが、軟膏だけはどっさりくれる。同じ皮膚面でも、両足先には別に症状があつて長期化している。さらに手の平、掌、足の裏には乾きがひどい。カサカサ。その他は睡眠がなかなかできず、入眠薬に依存する数年が続いている。昼寝などできない。横になるだけで眠れない。そのくせ、日中は眠いのである。

一般的には、医師から糖尿と慢性肝炎が重視され、投薬と週 2 回ほどの点滴又は注射で対応。投薬利用も血糖値がかなり高いのである。200 を超すこともしばしばである。肝炎が重複してきたのはここ数年で、この両者は治癒し難いといわれている。

これとの関連で、眼鏡が近頃合わなくなっている。目薬も処方されているが、一向に効き目がない。糖尿に併発したものと思っている。他は両手指のリューマチ性の痛みだろう。これも老人性といわれるだけあつてほとんど良くならない。別に不自由は感じないが……。一時あつた頭の痛みは最近なくなった。ポーとする痛みである。いかんな一と思つたこともあつたが、近日中はそれを感じたことはない。概して、ほどほど健康かなと思っている。食欲がないと感じたことはない。欲がありすぎるかもしれない。（平成 6 年 8 月 21 日）

注記：この後筆者は知事職を退任する。この「幾年月」は断続的に平成 10 年 5 月 13 日まで書かれているが、以前書かれたものとの重複が多くなり、健康状態についても 10 年 5 月 7 日にも同趣旨の書き込みがあつた。

○奥田八二氏の略年譜

年 号	事 項
1920 (大正 9)	11 月 1 日 兵庫県飾磨郡曾左村 (現姫路市) 刀出 で父繁之助・母はる恵の八男として誕生
1927 (昭和 2)	4 月 曾左尋常高等小学校入学
1933 (昭和 8)	3 月 曾左尋常高等小学校尋常科卒業 4 月 同小学校高等科入学
1935 (昭和 10)	1 月 奥田初治・春雄と養子縁組、兵庫県赤穂郡那波町 (現相生市) に移る。 那波尋常高等小学校高等科 2 年に編入 3 月 同小学校高等科卒業 4 月 龍野中学校入学
1939 (昭和 14)	3 月 龍野中学校 4 年終了 4 月 旧制姫路高等学校入学
1942 (昭和 17)	3 月 旧制姫路高等学校卒業 4 月 九州帝国大学法文学部経済科に入学

年 号	事 項
1943 (昭和 18)	9月 九州帝国大学仮卒業 10月 奥田初治長女幸と結婚 12月 学徒動員で迫撃第三連隊(福井県鯖江)に入隊
1945 (昭和 20)	12月 召集解除(宮崎県で除隊)
1946 (昭和 21)	2月 九州大学大学院特別研究生(社会政策専攻)
1950 (昭和 25)	5月 九州大学助教授(社会思想史担当)
1951 (昭和 26)	5月 社会主義協会発足、会員として活動
1954 (昭和 29)	6月 社会主義協会九州支局設立、事務局長
1956 (昭和 31)	6月 県政研究会発足
1959 (昭和 34)	2月 県政研究会として「県政白書」発表 7月 知事委嘱で筑豊産炭地の実態調査を実施し報告書作成、「黒い羽根運動」のきっかけに
1962 (昭和 37)	11月 社会問題研究所発足
1964 (昭和 39)	九州大学教授(教養部)
1965 (昭和 40)	4月 ソ連マルクス・レーニン主義協会の招待でソ連、東ドイツ、チェコを視察
1966 (昭和 41)	10月 社会主義協会分裂始まる
1967 (昭和 42)	6月 社会主義協会が向坂派と太田派に分裂
1968 (昭和 43)	6月 2日 米戦闘機ファントム九大計算機センターに墜落 10月 1日 九州大学学生部長に就任
1969 (昭和 44)	10月 12日 九大6月封鎖以来4カ月ぶりに解除
1971 (昭和 46)	9月 文部省在外研究員として英国、フランス、イタリアに留学
1973 (昭和 48)	5月 20日 九大教養部長に就任。78年8月まで3期努める
1974 (昭和 49)	9月 社会問題研究所所長
1976 (昭和 51)	10月 福岡県評二十年史編集・執筆
1978 (昭和 53)	8月 総合地域政策懇話会発足、代表幹事に
1979 (昭和 54)	7月 ロー・フレンズの会発足、会長に
1980 (昭和 55)	4月 博物館等建設推進会議発足、副会長に
1982 (昭和 57)	12月 九大退官
1983 (昭和 58)	4月 福岡県知事に就任 10月 ふるさと対話事業スタート
1984 (昭和 59)	1月 三井三池・有明鉱で大惨事、死者83人 10月 筑後大堰完成、福岡都市圏への導水開始

年 号	事 項
1986 (昭和 61)	9 月 情報公開制度スタート
1987 (昭和 62)	4 月 福岡県知事再選
1988 (昭和 63)	10 月 福岡ダイエーホークス誕生 日中定期航空路線開設
1989 (平成元)	6 月 旧県庁舎跡地に国際会館建設を決定 8 月 国際交流センター開所 10 月 平成筑豊鉄道スタート
1990 (平成 2)	7 月 トヨタ自動車と立地協定締結 9 月 国民体育大会 (とびうめ国体) 夏季大会開催 10 月 " 秋季大会開催 11 月 身体障害者スポーツ大会開催
1991 (平成 3)	4 月 福岡県知事三選 9 月 大型台風 19 号北部九州を直撃
1992 (平成 4)	4 月 福岡県立大学開設 5 月 全国植樹祭開催 10 月 個人情報保護制度スタート 11 月 中国江蘇省との友好提携 12 月 トヨタ自動車九州操業開始
1994 (平成 6)	9 月 知事引退を表明
1995 (平成 7)	4 月 福岡県知事を退任 4 月 アクロス福岡完成、理事長に就任
2001 (平成 13)	1 月 21 日 多臓器不全で死去